
歪

宇ノ鹿 すい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
歪

【Nコード】
N6816Z

【作者名】
宇ノ鹿 すい

【あらすじ】

死後の世界ルビックキューブにあつた命の大樹は結晶を崩壊させた。

湖は枯渇し、人は滅びの風をその身に浴びて、死骸へと成り果てていく。

また次の世界へと向うのか。それとも無になったのか。
乾いた風がびゅんびゅんと吹く。

序説

序説 1

我ここにありと主張する幽体が、天にて輪を組み上げて時計回りをする夕暮れ時。奏でられるのは恐々とするのに足元から伸び上がってくる恍惚。そういう音色が、崩壊の夕焼けでもある世界で風音と混ざり合い、しかし溶け合うことはせず、幾重にも音階が積み重なっていく。

はぐれてしまわぬように見えぬ糸を薬指に巻いている人間が、大きく舌と白い歯を見せる呆然ぶりで、奏でられる崩壊の音色の夕焼け、朱色に、自らも混ざりはするが、やはり溶解はしない。

人はこれを複雑性と紡ぐ？混沌と？それとも終末と？彼にはわからぬ。いや、彼女かもしれない。人間でしかなかった溶けない、混ざり込んでいる呆然は、天にて時計の針のように右回転をして、手を繋ぎ合って輪となり破滅を伝える顔の無い天使の集団を、ただ眺め見ることにしか出来ず、感情の昂ぶりが音色に合わせて雫となりて荒地にぼつりと落ちることには、意識を傾けない。傾けることができないのだ。

破滅は人間の感情にある種の救いらしき気配を纏う、やすらぎとか奮えを携えさせて、涙粒を落とすことにさえ神経をわずらわせぬのだから、ひたすらに人間は視る視る視る視る視る、輪を組み立てし顔の無い天使によってもたらされる破滅を。

終末らしき夕焼けが世界を染色する中で、光景と、演奏と、昂ぶりと、風と、景色。朱の景色。いや、それら全てが混ざり合うことでそれ自体が演奏のように。或いは額縁に納められる込められし精魂のように、何度も構築されなおすより強固たるを目指す長城のように。

芸術のごとくありし瞬間にて、奏でられることはいまだつづいて

いて、夢のようだと人間が現実味を持たず、手を打ち鳴らす。ぱちつ、ぱち。空しく……演奏を……。

自然と発生した拍手、そのぱちっ、の音を自らの耳で聞くその彼は、ハッと目覚めるように己の両手を見下ろす。思考する。自らの手を鳴らすことで共鳴を試みようとした自らは、浮遊感のせいで足の爪先が浮き立っていて、釣り糸で背骨を引き上げられ奈落に墜落させられるかのような、大事が起きる予感に伴う、ある種の絶望としかしそれに伴う幸福の両方を感じ取っていて、とても不安定な様子だ、と言葉には表せなかったが、そのように思考した彼の脳髓。は、間もなく溶け始めている。ドロドロ、ではなくサラサラと乾燥した粒のように洗い流されて川の水滴となるような溶解。ぱちっ、ぱち。その音が焚き火の時に爆ぜるものだと思えるようになっていく、過程、夕焼けと焚き火の炎が視界の中でダブって重なるのを、彼は確かに視た。

そして同一化していく。夕焼けも焚き火も自らも川も枯渴した水の溜まりも。分離することで世界を営んでいた様々な物質や要素らしきが、ひとつのこらず一つと化する。彼には貧乏から脱するという目標があつて、そのために一心不乱で頑張ってきたが、もう『彼は無くなっている。顔の無い天使が滅亡を奏でるのに、のせられて再生がされるはずの仮の滅亡であつたはずなのに、命の根幹であるものが崩れ落ちてしまったことで本当の人にとっての滅亡が訪れようとしていた。その事態を察知した人間だけが対処をし、鈍感であつたものは皆、本当の溶解を平然と受け入れていく。それが終焉だとは知らず。

夕焼けがやがて沈んだ頃。顔の無い天使たちは、のっぺらぼうの顔を赤、青、緑、白、オレンジ、黄の六色を点滅させたまま、人々を溶かすための時計回りを止めない。天使たちは、情け容赦などしない。ただひたすらに、回る。くるくる、くるくる。

終末 を主題とした演奏は、永久に続くかのように、終わらない。

破壊する対象である人間を、全て壊し終えるまで。

それが顔の無い天使の役割だった。再生があるからこそその、役割だった。

でも湖はこの時、すでに枯渇している。命を再生させる六つの湖は干からびて、数多くの繁栄をこの世に表出させていたというのに、もはやその力を人間の手によって切り取られてしまった。そのせいで湖は枯渇し、これによって混沌が開始され、夕焼けが落ちる頃には人間の半数以上が溶けるのを既に終えていた。再生されるものだと誤解したまま、破壊され、溶け、た。

序説 2

やめるんだ。やめるんだ、やめるんだ。

その世界は湖からの再生と、構築と破壊から成り立っているようなもので、その根幹が失われれば混沌が生じるのは当然だ。顔の無い天使が破壊を行い、腑抜けた悪魔が人間の構築を手伝う。湖から誕生する顔の無い天使と腑抜けた悪魔、そして繁栄のための道具が別世界より湖より浮かび上がり、人々の生きていく糧となり、時には争いに利用される道具ともなる。

だが湖が命の大樹の破壊により、枯渇。六つあった湖はことごとく失われて、また腑抜けた悪魔たちもほぼ全滅することになった。顔の無い天使は腑抜けた悪魔を、殴打によって、なぶり殺しにする。数で圧倒的に多い顔の無い天使は、一人の腑抜けた悪魔を六匹で取り囲み、私刑^{リンチ}、後に腑抜けた悪魔が顔につけている仮面を剥ぎ取って、露出した顔面も足踏みによってぐちゃぐちゃにしてしまうので……。

や、やめるんだぐえあ……………あ……………あ……………

ルービックキューブ

再生と破壊が八十年周期で繰り返される、世界。幾多の人を召喚

し、顔の無い天使によって消され、新たな人や建物がまた造られたり、湖より呼び起こされる。それが常識として存していた太陽と月の回転する球体の世にて、人だけでなく多くの生物にとって影響を与える変化。

その原因は人間によって引き起こされ、そして人間にもつとも被害が向うと言ってもよろしいことを考えれば、実に人間という種が自虐的な行為をしたのだと、他の知能を持つ生物からすれば思う所であろうが、そういった知能を持った生物がこの時には腑抜けた悪魔程度しかおらず、その腑抜けた悪魔も、六色に点滅するのっぺらぼうに囲まれて、六対一、と言った情勢が目立つ中、踏み潰され、わずかに固形が残る吐瀉物のように陥る。

夕焼けという西の地平線にかかる太陽に照らされ、赤く染まっていた夕焼け雲も、いまや暗闇が世界を覆ったことによって暗雲と化し、まるで地表全体が釣り糸で引つ張り上げられて太陽が見えなくなってしまうたかのような錯覚を起こすような、呑気な花が怯えるあまりに花びらを茶色にしてしまい枯れ落ち、腐植土へ混じるがごとく。

つまり全てが釣り上がっていく。世が転換する。地盤を揺るがすがごとくの強靱な釣り糸によって浮かび上がらされて不安定にぐらぐら。海から陸に上げられる魚はびくびくと跳ね上がることもしか出来ないように、釣り上げられた世の人々は溺れるようにして手探りで、火傷するような危うさで、花のように枯れ落ちるのかもしれない。勿論、腐植土は作物を育てることができの良い土壌かもしれない。しかし作物をそもそも作るうとする者がいなければ……腐植土を腐植土と呼ぶ者すらいなければ、良い土壌も悪い土壌も、無い。

釣り上げられてぐらぐらしているのに、夕焼けは沈んでいて、終末を奏でる落日の陽。暗雲ばかりが瘴気のごとく立ち込むようになり、いや事実、瘴気が漂い始めたのである。その瘴気が世界全体の風景を比較的以前より禍々しく、まるで童話にて描かれる魔界のような様相へと墮としていく。

賢さを見せて即座の死は免れた希少の人々は、ぐらぐらと揺られ沈まされ空気を大きく吸い込めないことに嘆く。「腑抜けた悪魔よっ」と叫ぶ、いやそれは咆哮……切実な涙声を枯らすまで叫び瘴気を万遍なく体内に吸収した者もいた。だが腑抜けた悪魔はもうその数を0としているが故に、天の国にいる彼らには咆哮も届くかもしれないが、人が生きるこの魔界にはもはや悪魔はいない。のっぺらぼうの顔を赤、青、緑、白、オレンジ、黄、に光らせ、時計回りを続ける天使たちだけが夜空にいる。腑抜けた悪魔は無念さを抱えたまま、既に滅亡している。

無念さは怨念へと落ち込んでいて、実は世に突如として垂れ流され始めた瘴気こそが、腑抜けた悪魔たちの無念さが人に害を為す形となつて生じた、怨念である。彼らの怨念が世界を魔界ルービックキューブに仕立て上げ、毒々しいまでの景観と、人間にとつて住みづらい環境を発生させたのである。湖を枯渇させた事に対する怒りが、怨念として……。このように世は人間にとつてより混沌と化していく。

顔の無い天使は遅いことに、時計回りを終えた頃に、湖の枯渇に気がつくが、全てはもう歪み尽くし、ほぼ全滅したと言っても良い惨状である。いや、むしろこれからであつた、混沌が深まるのは。顔の無い天使たちが破壊を行うのは、再生が前提にあるからこそであり、天使とて破壊する対象がいなくなつてしまつてはその生態の性質的に困つてしまうのである。

つまり、天使は破壊を行わなければ、足腰などの関節や、その全身を流れる血液などを、固まらせてしまう。そういう破壊をしなければ済まない性質を持っている。故に再生が為されなければ、天使たちは自滅へと向つていく他無い。天使たちが時計回りをやめる頃、全ては不安定にぐらぐらと揺らぐのを既に終えていて、揺れたその多くは絶滅したか、瘴気漂う空気に適応しかるうじて生き延びたかのどちらか。

顔の無い天使たちにも、絶滅か、適応か、その二択が突きつけられる。湖の枯渇が原因で狂い始めた歯車が、皮肉にも生物たちの姿

形を、進化のごとく急速的に変化させようとするのだ。絶滅の可能性という危惧を加えることで。

そして湖を枯渇させた元凶である人間たちもまた、その二択を当然に突きつけられたわけであり……。

釣り上がった世界に、まだ月は昇り上がる。かつてこの世にて繁栄の三日月だとか、ウロボロスの満月だとか言って神聖化されてもいた、仄かな月光零す天体。

昇り上がる。

序説3

雷鳴が轟きを発し、地の汚泥を抉る。雷の青紫色をした閃光が走る間はわずかであり、音がゴロロと鬱蒼としている暗あい世に走るが、誰もその轟きに怯えたりはしない。突如として毒々しい色の雨が降り注いできたり、身体が吹き飛ばされないように堪えるしかない突風が予期無しに吹いたり、真っ赤な色の雪がしんしんと降り注いできたりしても、誰も驚きはしない。

瘴気漂う世界にて歪イビクという、瘴気が凝固して怪物になったモノさえ誕生していた。そういう魔界であるから、悪天候などでは、その世に生きている人間は動揺しないようになった。慣れ、ということだろう。

幾度、太陽と月が巡っただろうか。日々数えてきた者はさすがにいないが、脳を利用することでその回数を認識することの出来る知性を携えた生物は瘴気漂う世界にて、いまだ存在していた。そう、人間は絶滅せず、生き延びたのである。「あれから」と言っただけは、数百年以上前の『終末』を語る。知ったように語る。経験した者など数百年という年月を考えれば一人もいないだろうに。

……が、何事にも例外というのはあり。数百年前から生きていて、その『終末』を実際に肌で、眼で、耳で、鼻で舌で経験した者、実

はいて、いまだ生きていたりもする。

事前に終末が起きると察知していた者が老いたまま、数百年呼吸と心臓の鼓動をやめずに存していたりする。それはある占い師の老婆であり、『終末』時にわずかに生き延びた人間たちの、唯一の生き残りでもある。

『終末』を越えて生き延びた希少な少数は、子孫を生み、瘴気と戦い、怪物と戦い、飢餓と戦い、災害と戦い、そして、死んでいった。

薄い布の上で両手を組んで眼を閉じ亡くなった者もいれば、ばらばらに肉片になって死んだ者もあった。瘴気に侵されて苦しみながら、死んだ者もあった。痛い痛い痛いと呼びながら、やがて事切れた者も、三日三晩、腹の虫が鳴るのに苦しめられて命絶やした者も……。

ただそういつた先人たちの生き死を通して、虫の息と呼べる滅亡の危機に瀕した人類たちは魔界にて再起。再興。数百年の間で、瘴気の中でも生きていくための手法を編み出し、湖の枯渇の時に同時に失われてしまったはずの”魔法”の技術もわずかだが掘り起こし、また新たな繁栄のための術、”祈禱術”も生み出した。魔法は万人がわずかに生活を利用するために用いれる術であり、祈禱術は一部の生まれつき才能がある者だけが利用できる、人の革新を促すのごとくに優れた術である。ただ本当に一部の者にしか宿らない力のため、人々は魔法を主なる力として生活をこなす訳だが、祈禱術と魔法ではそのエネルギー量と利便性には大きな差がある。一人の祈禱術のエネルギー量は、一人の魔法の総量に勝るといふのだから、祈禱術の才を持つ者がいかに貴重がられるか、神聖化されるものであるか、想像は簡単につくものである。

祈禱術によつて人は都市に瘴気、もしくは歪の侵入を防ぐ。半円状の膜を張ることで都市内に障害や悪性の空気が入り込むことを、妨げるのだ。これは祈禱術の利用例の一例に過ぎない。さまざまな場面で、祈禱術の才を持つ者は優遇され、神聖視され、祈禱術は実

際に人の生活を多くの場面で救う。

半円状^{ドーム}の空間で住まう人々は瘴気や歪^{イビツ}などの障害の無い、毒々しい魔草や魔花が咲くような作物も育たぬという悪環境の地を避け、比較的良環境の、清潔な、湖が枯渇し腑抜けた悪魔が怨念を撒き散らす以前の空気の中で住まう。

人々はそういった場所で作物を育て、また、家を建築し、下水道や道路を整え、家畜を育てる。人のために、人が住みやすくなるために、新たな形態の社会は創られ進歩していく。滅びる前にあった知恵を残っていた本などの資料、生き残った人同士の知識などによって再生させる。魔法もそういった手法によって再生された技術だ（昔と比べると申し訳程度のエネルギーしかないが）。

現在、半円状^{ドーム}内の都市は、世に六つ形作られている。

かつてこの世界^{ルビックキューブ}に、湖は六つあった。そして人々はその六つの湖を中心として営みを続けてきた。その営みを模倣するかのようにな、人々は再び六つに別れて都市を形成し、その六つがそれぞれ時に協力し、時に争うことを繰返してきた。伴って、瘴気や歪^{イビツ}を対人兵器にしようとする都市もあり、機械を積極的に製作し他の都市と差をつけようとする都市もある訳だが、歴史は繰り返すとも言つのだろう。そういった人間たちの営み方は、滅亡以前と何ら変わらない代物である。人間は進化を行うまでもなく、湖の枯渇という大変動を乗り越えてみせて再び発展するのである。何百年という期間を使って、大混沌に陥った人間たちは”六つの都市”という形態を取り戻したということだ。半円状^{ドーム}内では碌に生活できないという悪い点はあるが、その代わりということではないだろうが祈禱^{レイ}術という新たな力も得た。

湖の枯渇と、腑抜けた悪魔の放出する怨み。そしていまだ時折出現しては人を破壊する顔の無い天使。そして突如として発生する天災。これら様々な障害によって生活の上での不満も人々には多々あったが、その生命力、つまり欲望でもってして、困難を乗り越えてきた。そして近年、人間という種は長年の連なりと積み重ねによつ

て、半円状^{ドーム}の中で平穩を手にしたのである。

だが百年以上生き続ける不死の占い師の一声によって、月の明かりを遮る暗雲がまたも立ち込める。

「巨大なる生物の侵攻が、私たちの積み上げし数百年を、押し潰すであろう」

彼女の予言は、悪いものに限ってよく当たる。

災いをわざわざ呼ぶ占い師、と揶揄されてしまう程に悪い予言に限って当ててしまう老婆の占い師。彼女が言ったのだ。

巨大なる生物の侵攻が、積み上げてきたものをぶち壊してしまう、と。

序説 直前

序説 直前

腑抜けた悪魔が瘴気を噴き出した時、そこにはどういふ思いの猛りがあったであろうか。もしくは瘴気が歪イビツという怪物に陥るのは、腑抜けた悪魔の怨念の為せる技だとしたら、人間の犯した罪は腑抜けた悪魔にとつては死刑に値する程の代物ということか。怨嗟の深さが、牙が皮膚から入り込む時に毒を筋肉や神経に仕込む度合いも強めるとすれば、その傷口から猛毒が生じて人間の全身は腐敗するであろう。恨みが復讐を呼び、世界に腐敗をもたらす。

まず知性ある生物が真つ先に腐らせるのは身体ではなく、心である。

そもそも身体は死ぬまで腐るものではないだろうが、心は生まれてから数年で腐ってしまうこともままある。勿論生きている間に腐るのだし、人間は脱皮を日々行っているのだから再生はされるであろうが、死んだ物の心が腐敗したのならば脱皮をするわけにもいかないだろう。

故に、瘴気は消えないということだろうか。腑抜けた悪魔の死んだ後に発された怨念が、世に蔓延してしまつたから、脱皮が行われないのだとすれば。

怨念よどうか治まりたまえ、と多くの人々は請うて来ただろうが、世の中に毒々しい気配は蔓延したままで、禍々しい紫色をしている。祈祷者がいくら祈りを捧げても、その怨念は浄化されることはなく空気を濁らせたまま。非常に有害で、人間が何の対策もなくドームから出てしまえば場合によっては即死、まぬがれても重大な病を背負うことにはなる。心身ともに腐るのだ。腐ってしまうと、もうイ

キティラレナイのだ。

が、人として無策ではない。有害たる相手にはそれ相応の手段を講じ、撃退もしくは滅殺、あわよくば共存、するのが知性ある人間達の欲求が為す技というもの。障害は取り除く、と。そのために脳を使い、工夫によって苦難を乗り越えることを欲求の元こなしてみせる。人の営み。

そして六つの都市に別れ住まう人々。都市の名はそれぞれ、セキドウ、セイラン、リヨクチ、トウカ、ハクロ、コンゴウ。上から順に、赤、青、緑、燈、白、金の色を象徴とする国々であり、彼らは離れた位置にそれぞれ住んでいるが、祈禱術を利用している”祈像”と言っいわば通信機のようなモノを使用することで、連絡を取り合い外交している。祈像は同時に数十人以上で連絡を取り合える上に、それぞれの全身を一つの広域空間に投影してくれるので非常に便利な連絡手段とされており、都市間での首脳同士の会議も、瘴気が屯する外界に出ることもなく安全な場所で行えるのである。祈禱術のおかげ。そして占い師の老婆は、祈像による広域空間にて六カ国の首脳たちに要求を告げる。

「今すぐに全都市の妊婦を私の目前に連れて来い。健康であるか不健康であるかなどは一切問わない。とにかく妊娠している女を、今すぐに私の目視できる位置に引つ張り出してくるのだ。各都市が総力を挙げてただちに取り組み。さもなければ、オオイナルモノに潰されるぞ」

六カ国の首脳たち全員の頭上に、『？』、が浮かび上がったのは言うまでもない。だがしかし、老婆の凶を占う言ノ葉に対する信用が高い為に、老婆の要求を拒否するような頭は、一人もいないまま、広域空間での都市間会議は終わりの鐘を鳴らし、カーン、カーン、と打ち鳴らされるに伴って彼らはその場所より立ち去り、即座に総力を挙げて妊婦たちを集め出す。

老婆からの予期無しに発された大音声。何が起きるのか想像もつかぬまま発されたキーワードは『妊婦』。過去幾ばくも争いを絶や

さなかつた六力国の首脳は、しかしこの時は一丸となつて妊婦集めという指令に従順し、オオイナルモノとは何奴なのか、と想像し背筋を震わせて戦慄する者もいれば、全ての妊婦を集めてその腹の子を殺すつもりじゃあるまいなと悪い方を勸導している者もいた。赤子全てを生贄に捧げて天災を免れるという手法が取られるのではないかと不安なのだろう。

占い師の老婆だけが、赤子たちやがどのように扱われるかを知っている。その白髪の、耳毛が床下まで届くほどに伸ばしているシミだらけの老婆。シワだらけの老婆。彼女だけが、妊婦や赤子たちなどのように扱われるのか、胸内で知っている。彼女が突然提案したことだから、彼女しか知らない。彼女が妊婦をどうするつもりなのか答えていれば、周囲は少なくとも不安を感じたりはしなかつただろう。だが時が性急だったから語れなかつたのかもしれない。語らなかつたのではなく、語る時間さえも勿体無かつたのかもしれない。老婆は耳毛を垂らしたまま、ただれた唇を塞いでいるから、老婆の考えは誰にもわからない。また同時にわかる必要がない。彼女が問題を解決する手段を理解しているのならば、他の者がそれを知る必要はないということだ。他の者の力を老婆が必要とする時が訪れれば、老婆は自然と唇を開くのだから。

そして八ク口に三十五万人の妊婦が集まつたのは、わずか七日後のことである。七回太陽と月が回る間に六力国全ての妊婦が、八ク口の大広場、大通り、また裏通りにも、破裂してしまいそうなお腹を抱えて集まつてみせたのである。いつ危うい陣痛に襲われるかわかつたものじゃない様子の人も当然いるわけであり、実際、血を垂らしてしまっているような容態となつた妊婦も発生し、八ク口都市内は、バナナの形をしたUFOが突如として夜空から降臨する、とても言うかのような厳粛な空気、何とも言いがたい重苦しい空気、が蔓延してしまつていた。老婆が突如、言葉を発してからわずか七日で集合させられるという強行によつて、妊婦たちは疲れ切つていて、顔色も悪くて倒れないのが不思議なくらい。そう、彼女らは一

人も倒れてはいない。魔法の力、祈祷術の力、で守られているからである。そういったサポートはされているのだが、それでも妊婦たちは疲労を隠せない。当然であろう、心因的な部分もあるに違いない。

ただ集まれというだけで理由も聞かされていないのだ。『処刑します』と言われる可能性だって零じゃない。妊婦が三十万人一箇所に集められるという事自体が異様なのだから、『処刑します』という異常な宣言がされることは想像上、不安を感じやすい妊婦ならば特に、思えてしまうことだ。ただ祈祷術の安らぎがそういった部分の補助は欠かさない。それでも空気はバナナの形をしたUFOが突如として夜空から降臨する、とでも言うような厳粛を抱えているのは、不安というものは紛らわしても、再度、纏いつくものであるからだろう。

だがその重苦しさがある瞬間にて止まる。ピタツと停止したように。何かが起きる予兆。そういう雰囲気。一時間ほど続いていた重厚は小粒のように小さくなっていき、代わりに騒々しさが大通りや広場を駆け抜ける。少し高めの、妊婦たちの民声。

お腹とお腹が擦りあってしまう程、場合によっては将棋倒しで全滅もありえてしまうのではないかと冷や汗を掻いてしまうほどに狭まっている熱の籠った女性の密集地帯。彼女らは顔を上げて天を仰ぐような姿勢となった。

彼女らが眺めた先にあるのは青白い光。かすかに薄暗くなりつつある藍色の空に月よりかは大きな球体が、青白い光を発光しているのを見たのである。ほわ、ほわ、と浮かんでいるその球体にいるのは占い師の老婆その人。彼女が藍色の空に球体に包まれた状態で現れたことから、広場などの妊婦たちは周囲と何事か喋り合い（たまたま隣になった妊婦と天に指差し合ったりするわけである）、騒々しくなったということ。

青白い光に包まれているのは今回の招集をかけた張本人である占い師の老婆その人で間違いは無いのだが、彼女はほわ、ほわ、と藍

色の空を漂うばかりで何事も喋らない。瘴気漂う外世界を祈祷術や魔法に守られながらとは言え、長い距離をひたすらに進んできた妊婦たちからすれば、

事情も説明されず、ほわ、ほわ、とされるのは苛立つ行為である。やがて彼女たちは苛立ちに身を任せて非難を轟々と燃やした。死ね、ごみ、くそ、かす、と遠回しに叫んだのである。

だが占い師の老婆は、やはり、ほわ、ほわと浮かび、何かを探すようにして妊婦全体を眺め、天高いトコロから、彼女たちを見下ろしている。

老婆の青白い光は、広場も表通りも裏通りも、そのどの場所にも息づいている妊婦たちをくまなく空中から観察しているのだった。耳毛を垂らしたまま、ギョロツとした双眸で妊婦たちの一挙一動を見逃さないようにしているような老婆には、異様なほどの真剣さがあつて、ギョロツ、がギラギラと妖しい光を放っている。何百年と生きた者だからこそ出来る双眸であろうか。

遠回しな罵倒を繰り返していた妊婦たちも、その双眸には黙らされてしまい、彼女たちは再び重苦しさに押し付けられて、わずかに静まり返る。静かな空気の中、青白い球体はふわ、ふわを続けて、妊婦たちの上空を二、三周ほど、回り、漂う。

そして彼女は六人の妊婦に目処をつけ、空中に浮かせた。空中に浮いた六人の妊婦たちはそれぞれセキドウ、セイラン、リヨクチ、トウカ、ハクロ、コンゴウの六都市に住んでいて子を授かり腹を膨らませている女性であるが、占い師の老婆の双眸に射られ選抜されたということは、そのお腹に宿す子を自らの子として産むことは出来ても、自らの子として育てる権利は奪われてしまうということであり、また同時に、その産まれて来る赤子が、これから十数年後に訪れるであろう天災のために命と年月を掴まれるという意味でもあるのだった。命の束縛。

六人の妊婦の想像していた未来を書き換え、また赤子たちがどのように生きるのかを決定付ける、比較的透明な、まだ何色をしてい

るのかさえわからぬ六本の矢が勢い良く発されて、妊婦のヘソの緒に突き刺さるがごとく。六人の妊婦たちは三十万人の群集から、耳毛の長い占い師老婆だけが知る理由によって、選抜され、己の子として産み育てるはずだったお腹の膨らみの中で眠る子を、ほとんど奪い取られるようなもの。自らが腹を痛めて産み落とす子を、偉そうに空を飛び回る老婆の語らぬ思惑によって使われてしまうということだから、六人の妊婦たちは当然落ち着いた気持ちではいられない。

老婆の魔術が何かで宙に浮かされ、腹を膨らましたまま何の抵抗もできずにハク口の宮殿の方へと連れて行かれる六人の妊婦たちは、まるで家畜の牝牛のようにも視えたから、選ばれなかった他の三十万近い妊婦たちは、安堵を深く感じ入る。よかった、よかった、という弛緩がそこから中で湧き上がって、連れられていく哀れな牝牛の後姿を見送り、瘴気漂う外界を歩かなければならないことを愚痴りながら、各々の都市へ帰って行くのだった。祈禱術に守られつつ。大群によるノイズで満杯と化していたハク口の気配は、さざ波が引いていくかのように引き下がって行き、一転して廃墟のように物音すら立たない沈黙に囲われた。もちろん幽霊が住まう都市ではないので、夜が深まると共に白の電灯が灯され、ぼちぼち通りには人々の気配が歩き出したのだが。今まで家の中に避難していた人々が、平常の生活を再開したのである。

さて、ハク口でもっとも豪華な装飾をされている、大理石で造られた宮殿に、老婆に連れられて招かれた六人の大きなお腹には、臍帯と繋がっている小さな小さな『命』がある訳だが、老婆が選抜したのは妊婦というよりかは、そのへその緒に繋がって羊水内で呼吸している『命』だ。宮殿の、絵画が壁中に貼り付けられている直方体の部屋で、漆黒の炎を燃やす蝋燭が幾本も立てられていて、その炎が発する火の粉が天井に張り付いて、銀の粒とでも言うべき輝きを持つ星々と化している。だから天井はプラネタリウムのように光っていて、蝋燭の黒い灯火と相俟って、壁に描かれている絵画に、

陰鬱に見えもする影をもたらししている。

そういう直方体の部屋の中心に座る占い師の老婆は、もはや青白い球体には包まれてはいないが、代わりにエメラルドグリーン之首飾り、シワガレタ自らを隠すためらしきに見えるレース付きの布切れを頭に巻いて、身体には紫色の薄手の布を何重にも巻き付けている。六人の妊婦はこの時、灰寄せをさせられるような夜伽をさせられるような憂鬱に包まれた心で、老婆の不気味たる容貌を視る訳であり、余計に憂いの気持ちは強くなるというもの。産む子供の処遇自らの処遇。都市で帰りを待っているであろう家族のこと。無事に帰れるのか。少なくとも何も起こらずこのまま帰れるはずはない。明らかに三十万人の中から選ばれた。老婆に選ばれても何ら嬉しくない。いやだ。かえりたい。帰して欲しい。この部屋の空気、何か悪い。鼻がムズムズする。

と、大まか、こんな風にして六人は憂鬱である。まさに貧乏くじではないのか、と。皆、この占い師の老婆が悪い未来を告げる者だということとは当然知っているのだ。悪い将来が待っているのだと予測することには自然、なってしまう。よって部屋内の空気は、黒い炎や影を作っている絵画などの景観のこともあって、実に半死半生、生きた心地のしない妊婦たちであった。

彼女たちは六人横並びにされて、怪しい風貌の老婆の目前に立たされる。そして彼女たちの目の前、蘇芳色のテーブルクロスが敷かれている蝋燭や水晶玉が置かれた、大理石で造られているらしきテーブル。そこに占い師は六つの宝石を、右から順に、赤、青、緑、白、燈、金、と左に向って置いてみせる。宝石はそれぞれ形が違っていて、星型、丸、金平糖、ひし形、など様々。どの宝石も、普段の妊婦たちが生活を送る上では手を出すは愚か、眼にすることさえ難しそうな高貴らしき輝きで幾重にも光を反射させているのだから、妊婦たちはここにきて始めて目を輝かせた。憂鬱ばかりだった心に一筋の光明のごとき宝石。彼女たちは期待する。まさか、これを貰えるのだとすれば……いや、そんな都合の良いことがあるわけがな

い……だが、何かの条件をクリアすればこの宝石を貰えるのかも
れない……。そう考えた彼女らの瞳は、うるうると潤いを帯び、深
い期待によって憂鬱は吹き飛ばされた。疲れが見事に吹っ飛んだ！
それほどに目に目映い、罪深き魅惑を携えた六色の宝石であるが故
に、コンゴウからはるばるやってきた妊婦が尋ねる。

「占い師様は、これの他にも、こんなに輝く宝石を持っていらっし
やる!?」

だが妊婦の興奮とは実に対比的、老婆はレースの下で平然とした
様子の双眸を覗かせて妊婦たちを、鷹が獲物に一直線に向ってくる
時のごとくの勇ましさを射た。老婆の身体は萎れていてみるからに
貧弱そうだが、その双眸は獰猛な獣を連想させる力強さを持ってい
て、妊婦達の興奮はそれに射られることで静まってしまふ。

萎縮した妊婦を眺め回してから、満足気な様子を見せる間もなく、
老婆はテーブルに置かれていた水晶玉に両手をあてがうと、実に占
い師らしい手付きと仕草で、その球体を弄ぶかのようにして撫で回
す。すると透明な色をしていた水晶玉にみるみる変化が生じたので、
妊婦たちは思わず身を乗り出しそうになってしまうのを、再度老婆
が鷹の双眸で射止め、軽率な態度を取るものじゃないとたしなめる。
ソノ後に老婆は呪文らしきを唱える。魔術であろう、と妊婦たちに
もそれは理解できた。言葉は奏でられるように軽快で、慣れた者の
発声である。何度もその呪文を唱えてきたのだらうと推測できる軽
やかさであった。

やがて呪文が唱え終わる、いや、呪文が唱えられている中途の時
点で、透明なる水晶玉に変化は現れていて、具体的に言うとそれは
煙霞とでも呼ぶべき濁りなのだが。呪文の途中では水晶玉内だけで
留まっていた煙霞であったが、やがてそれが部屋内に溢れ出ると、
四角の枠を形成する。つまり、ディスプレイのようなもの。妊婦た
ちにも視やすいようにという老婆なりの配慮ということだろうか、
透明に戻った水晶玉には『何か』が映っていて、その『何か』はデ
イスプレイにも映されているのだった。

妊婦たちはその『何か』を見て驚愕する。「なんて恐ろしい光景でしょう！」「真実とは到底思えないですわ」「まるで太陽に頭がくっ付いてしまいそうではありませんか」「ああ、神よッ！」「占い師様、このような災いが人間に降りかかってくると。人間を襲うというのでしょうか」

矢継ぎ早に言葉が並べられて、占い師に回答が求められる色が濃くなり、とても落ち着いてはいられないと地団駄を踏みそうな形相をコンゴウの妊婦は作った。鬼のような形相である。その形相に尻込みしたという訳ではないだろうが、占い師の老婆は質問にスラスラと答えてみせて、結果としては妊婦たちを更なる不安に追い込んだ。話は黒い炎を発する蠟燭が全て溶け落ちる頃まで続いたのだが、その間妊婦たちは気持ち悪そうに口元を手で抑えて話を聞く。祈祷術や魔術のサポートが彼女らを護っていなければ実際に嘔吐してしまふ妊婦もいたであろう。

ディスプレイに映り込んでいた『何か』とは、吐き気を催したくなる程に奇怪な生き物。さらに、その奇怪さを保ったまま、山のように巨大な生物であった。天を衝いて太陽の射光のほとんどを遮ってしまうほどに巨大な化け物が、水上を漂っているのだ。沈むことなく、水上にぷかぷかと。

「キモチワルイ！」

コンゴウの妊婦は生理的な嫌悪に身を任せて叫んだ。顔をぐにやりと歪ませて大声を出す彼女も少し怪物染みているなど老婆は密かに思ったが、言わないで胸の中にそつとその感情を仕舞って、二度と出てこないように封をする。

ただその『何か』は、事実、コンゴウの妊婦の怪物染みた様子などモノともしない程、人に生理的レベルの不快、嫌悪、鳥肌ではすまない感情をもたらす。まるで自分の下痢気味の排出物を見せられているかのような不快感、と同時に素裸で巨大象と対峙させられているかのような威圧感もある。とにかく、長い間眺めれば眺める程不幸が近づいてくるかのような嫌悪にかいつままれる。

では、具体的にその巨大な災いは、どのような姿形をしているのか。妊婦たちはディスプレイにどのような姿形を見たのか。

まず、全体像としては、人間の顔がついている虫の幼虫、と云ったトコロである。人間の顔がくっ付いている虫の幼虫が、うごうごと水面を這っているような動きをして前進、大海原を何かを求めようようにして蠢いているのである。体色は、顔面部分だけ真つ青。本当に青くて、しかもスカイブルーなどの爽やかさは微塵も無い、病的かつ靈的な青さをしている。なのに目は紅い。真つ赤。赤目が二つあり、それが何処を見ているのやら、わずかにも動作しない。顔に常時ついているのはその赤目二つだけ。だが時たま、突然鼻が出現したり、髭が出現したり、唇が出現したりする。によきつと土の中から芽が出るみたいに、青い肌から飛び出してくる鼻や髭や口。全部、糞尿みたいな色遣いをしている。糞尿色といはどついう色かというつと、ひどく臭そうということである。

体に当たる部分は芋虫のような緑色をしていて、その体表にはイボが無数に備わっていてそこから湯気みたいなものが呼吸のペースで排出されている。時々そのイボからよろつと黒ずんでいる糸みみたいなのが出てきて、大海原に流れ落ちていく。あの黒い糸みみたいなのは何ですか、と妊婦が尋ねると、老婆は「あれは卵だろつね、おそろく」と平然と答えてみせる。「卵……」妊婦たちに暗い気持ちよりのしかかる。老婆はさらにこう答える。

「あの卵が孵化すると、あの龍を護る兵士である竜が産まれて来るんだよ。で、あれらが私達の住処である地上を押し潰すのは十数年後だね。それまではずっと、大海原を這っているだけだからいいのだけれど。まあ、卵だつて全部が孵化するわけじゃないだろつし、兵隊の寿命は早いみたいだから、兵隊はそこまで多くはならないだろつけれど、まあとにかく、あんな気味悪い姿をしている龍に押し潰されるのは心地の良いものではないねえ。勿論、陸に上がる頃には成長して羽も生えていることだろつし、手足や鱗だつて備わっているだろつが、元があんな青々とした気味の悪い顔をしているんだ、

成長したって気味が悪いだろうよ。しかも、ああいう大きい龍が姿形は違えど、一匹ではないときたものだから、厄介なのさ。やつら龍は、三匹いる。そして私はそれら三匹を総称して、遽墟渠（あわただし大きいなかしら）と呼んでいる。遽龍と、墟龍と、渠龍さ」「あの不気味な幼虫が、龍……伝説上の生きものだ、言うのですか？」

セイランの妊婦は今にも倒れてしまいそうな真っ青ぶりであるが、それでもディスプレイに映っている龍の幼虫とやらよりは青くない。「まだ足が生えていないから地上には降り立たない。成長する時まで奴らは大海原を漂うだけだ。呼吸に伴う産卵を繰り返してな。だが奴らは地上に降り立てば、我ら人間を滅ぼすであろう。何故ならばアレは歪ヒューの怨念が産み出した、腑抜けた悪魔のさらなる悪意、怨嗟の発展形であるからだ。数百年前からの彼らの怨念が、ついにこのような化け物さえ造り出したのだ。私達は生き延びるために、これを撃退、もしくは滅殺しなければならぬ。そのために、ここ数日は世界中の妊婦を集めることに時間を費やし、そして六つの寶石によって才を六つの赤子に与え、十数年後に生じるであろう終末への対抗策となつてもらおうという計画を立てた。当然、今お腹にいるその赤子と妊婦であるそなたらは離れて生きていくことになる。世界のためだ。だが、この赤子たちの生と、お前達六人とその家族の生を、終末の時が訪れるまでは、私が保障してみせよう。悪いようにする気はサラサラない。世界を救うため、どうかお前達六人の赤子の『命』を、私に預けて欲しい……この通り……この通り……お願い申し上げる……人の繁栄のために……」

短いようであり、長いようでもある連なりを語り終えた老婆は、冷え冷えとしてうつすらと暗い中で頭を垂らし、謝意のあることを示した。もはやレースの下にあった獣のような鋭い双眸は枯れてしまった植物のように弱々しく伏せられて、漆黒の炎の灯火が消えかかっている暗い屋内で光っているのは、すでにエメラルドグリーンエメラルドグリーンの首飾りと赤、青、緑、白、燈、金、六色の形様々な宝石だけであ

る。

ディスプレイも消されて、老婆の垂らされている頭。それを、突然の宿命的な束縛を与えられた妊婦たちは、事情の理解と世界が滅んでしまうという認識と、これからの生活が一変して想像がつかないという驚きと共に見つめた。そして占い師の老婆は頭を垂らしてはいるが、私達に拒否をする権利などあるわけがないではないか、と妊婦たちは胸内で呆然とし、そしてハク口の妊婦は堪えきれず涙を両眼より流してしまった。そして涙声で咳く。

「これまで考えてきた未来は何もかも、掌からこぼれ落ちて、結晶にすらならないんですね」

その言葉がきっかけとなって、みんな泣きそうになった。

コンゴウの妊婦でさえ、泣きそうだった。

だが互いにわんわん泣いて、肩を抱き合って慰め合う、という訳にもいかなかった。

遽墟渠（あわただしい大きなかしら）と占い師の老婆が呼称した龍の一角を、世界をやがて滅ぼす災いを、彼女たちは見てしまったのだから。

やがて落ち着きを取り戻した妊婦たちは、頭を上げた占い師に向かって、告げた。

「元気な子供を、世界のために産み落として差し上げましょう」

彼女たちは宝石を一つずつ手に取り、その魅力溢れる輝きを胸に置いてギュッと握り締めてから、お腹の辺りにあてがう。その女性たちの覚悟を見せられて、占い師の老婆は伏せていた双眸を上げて彼女たちを見る。そして水晶玉を弄くりながら告げる。

「毎日、毎日、少しずつその宝石を砕いて食べなさい。一欠けらずつを食していつて、産まれるその日に丁度全ての宝石が無くなるように、計算して食べていくのです。予定日が狂わないよう祈祷術と魔術の加護を忘れずに。あと、愛情もね。力強く育て、と願うのです」

六人の妊婦達は占い師の言うとおりにした。

良い環境下で大切にされ、普段の生活ではお目にかかれない豪華な部屋を与えられ、まるで栄えている王族か貴族の一員であるかのように取り扱われた。彼女らは勿論それらの待遇に喜んだが、しかしそれに自らの気を持っていかれたりしなかった。元気な子供を、世界を救ってくれる力強い子を、運命に翻弄されず生きていける子供を、この身体から産み落とす。その一心を忘れることなく、彼女たちはお腹を温めて、そしてドクン、ドクン、とやがて鼓動をはじめた一つの生命に言葉を語りかける。どうか元気に育って。どうか世界を救って。どうか遠くに離れてしまふ私達を許して、と。そして彼女たちはそれぞれに与えられた宝石を、毎日、少しずつ、少しずつ、砕き、口の中に入れて飲み込む。そして力を感知する。この宝石には奇跡を呼び起こす要因が詰まっていることを妊婦たちは自ずと悟った。

だが不安が無くなるということとは違った。むしろ不安は日々を重ね、お腹にいる赤子たちが一つの生命としてハッキリと生を告げてくるに伴って増大するのだった。時折、弱音を吐くこともあって、周囲からわがままだと映ってしまう妊婦も、いた。世界に通用する赤子を産めなかつたらどうしよう、何かトラブルが起きてしまつたらどうしよう、と不安が高まって眠れない日々を送ってしまうのだ。だが祈禱術と魔術による加護と、後、毎日少しずつ飲み込む宝石の欠片が彼女たちの力になってくれたし、また時折、遠方より彼女たちの家族から手紙が届いた時には、溜まりこんでいた不安という感情も少しは紛らわされた。

そして彼女たちのお腹が充分に膨れきった頃。同じ日、同じ時間。遂に、彼女たちは出産した。

産まれて来た赤子たちは、まさに運命を与えられているためであるろうか、その容姿に異彩たる部分を持っていた。赤髪の子と、青髪の子と、緑髪の子と、白髪の子と、燈髪の子と、金髪の子。臍帯に繋がったまま母親たちの子宮口より生れ落ちた彼と彼女らは、その生に伴う宿命を指し示すかのように、独特の輝度を持つ髪色をして

いたのである。希望ある未来を導くという期待を人々に持たせる、大勢の人間が良き吉兆と感ぜられる異彩であった。

さらに白髪（というよりは銀髪に近いが）の女の赤ん坊は、大きさ、つまり見映えは他の子とあまり変わらないのだが、羽のような軽さと青白い光を纏った様子で出産された。これはあまりに予想外のことで、その場にいた全ての者の顔色が、驚愕に染まった。

「私は悪い事ばかり占ってしまいが、こうやって突然良いことが起きると、そういう性質も悪くはないんじゃないかと思えてしまうよ。皆、この銀色のごとき白髪の女の子は、祈祷術の才をその身に宿しているぞ！ 間違いない！」

鬼に金棒ということだ。白の宝石の力を得たために白髪である女の子は、万人に一人しか備わらない祈祷術の才能を持ち抱え、産まれ落ちた。

占い師の老婆は興奮した様子になり、へその緒を取って母親との繋がりを切り離れた赤子を優しく持ち上げると、皆に見せるように高々と掲げた。

「腑抜けた悪魔の怨念には悪いが、こうなってしまうえば人間という種の勝利は揺るがないであろう！ さあ、六人の赤子に様々なことを教え伝え、世界を救う英雄とするために様々な用意をしよう。いや、まずは宴か！ 勝利を祝う宴だ！ 人間はその幸運と知性によって、また生き長らえるのだ！」

占い師の老婆はひどく興奮して、赤子を助産士に渡してからはくるくると踊った。

宴も開かれて、世界中の人々が六人の妊婦を讃え、赤子たちをすでに英雄視さえして盛り上がり、酒を飲み歌を歌い、踊り、無礼も気にせずに騒ぎ立て、夜中ずっと陽気にはしゃぎまわった。

その宴会の途中で、全てをやり終えたとしても言うかのように、次々と妊婦たちが息を引き取ったことは占い師が密かに占っていたことである。誰にも言うてはいなかったが。彼女たちはしかし穏やかな顔をして、苦しむこともなく、ベッドの上で華やかな空気を鼻か

ら吸い込みながら、やがて呼吸と心臓の鼓動を止めた。

占い師の老婆は目を瞑り、彼女たちの最期を称えてから、祈象の広域空間に赴いて、各都市の首脳に今後のなすべきことや、各都市の協力の必要性を説き、「私達には幸運が訪れはしたが十数年後まで一時も気を抜いてはいけない、やり遂げた妊婦たちの為にも」と語った。

首脳たちは首を縦に振った。一致団結がそこに見られはした。

だが天災が訪れるのは十数年後ということと、祈祷術を持つ赤子が生まれたという幸運の存在が、首脳たちにわずかに気の緩みを与えていて、その『わずか』が、大きな乱れを巻き起こす可能性を高くしていた。首脳たちは遽墟渠（あわただしい大きなかしら）の姿形を水晶玉とディスプレイを通して見せられたというのに、危機感を存分には感じなかった。これも『わずか』な気の緩みであり、大きな乱れを引き起こす要因の一つであった。

占い師の老婆は占いでその悪い方向に気が付いて、その方向性が自らにも牙を剥く可能性を察知し、用心してはいたのだが、ある日彼女は何の前触れも無く死んだ。暗殺、された。

長年死ぬことのなかった老婆の突如たる暗殺、死亡は、各都市に衝撃を与え、そして分裂を引き起こす。

人間は十数年後の天災のことなど忘れたとでも言うように、各都市間の関係を年々悪化させていき、取り返しの付かない歪みを生み出していくのである。それこそとん拍子で。

そして歪曲が少しずつ世の中に軋みを与えていく、居心地が良くはない、息詰まるような環境下で、六人の特別な赤子たちは育った。だがたしかに、一人立ちも出来る優れた能力を、長年の教育によって与えられてもいた。

占い師の老婆が突如として暗殺された後も、その意志を継ぐ者たちによって、彼らは英雄となるための教育を受け、才能を引き延ばす形で、充分に成長したのだ。

龍は竜を産み落としながら、幼きを脱して陸にもうじき上がる頃、

彼ら六人も日々鍛錬を欠かさず行い、教育され、様々なことを感じ、身体と精神を成長させた。

都市間が落ち着かず決して景気の良い世の中とは言えない中、彼らは龍殺しを行うために祈祷術で守られているドームより旅立つ。瘴気のただ中、歪イビツが漂う毒々しい害世界へ。

何百年も前より続く、腑抜けた悪魔の怨念の、滅殺。

それが彼と彼女らの、役割。

之史

占い師の老婆が死んでから十数年の月日。

平和を好むハク口の都市にも人間同士による争いの火種や、歪^{イビツ}からの襲撃が頻発化している等の落ち着かない状況が訪れている。十一月の街並みはどこか忙しなくて、行き交う人々は真剣な面持ちで仕事場に向ったり、学校に授業を受けに行ったりしている。

浮浪者らしき人が魔車の走る駅の構内で、ヒーリングの魔法で自らの寒気を取り払うことに躍起になっている光景も見られる。魔光掲示板に次の魔車が何時何分にホーム内に停車するのか示されていて、並んで列を作りホームへの魔車の進入を待つ人は、携帯魔通器などを手に持って、指でそのディスプレイを弄くり、操作などをして、魔車が来るまでの暇を潰している。その人々の多くの表情はどこかしら不安げを纏っていて、露骨にため息を付いてみせる人の数も、ちらほら見受けられる。今朝、悪いニュースを見聞きした影響だった。

魔車がホームに待っている人々から見て右側より入り込んできた。燃料として使用を終えた灰色のエネルギー体を幾箇所も排気口から放出しているが、それが体躯に纏いついて霧を伴わせているかのような光景と化している。気候との条件と重なって起きる珍しい現象であり、ミストボデイ、と一般に呼称されるが、誰もその珍しい現象を見て口笛を鳴らすことは愚か、拍手を鳴らすことさえせず、しかめっ面を作るばかりだ。

「うわー。やっぱ今年で人類はオシマイだな。ミストボデイが不吉に見えるよねえ。ねえ、その可愛い女の子。会社なんかに行つて働くよりさ、俺達と遊んだ方が楽しいぜ？ 一緒に楽しむためにさあ、これから面白い所にいかないかな？ どうせ近日中に世の中は

駄目になるんだぜ。この平和ボケした都市もどうせ潰れちまうって」

金髪に鼻ピアス耳ピアス、服装はド派手な色遣いの色とりどり。ナスビみたいな顔をしていて、やけにぴっちりとしたジーパンを履き、表情はだらしなく弛んでいて、スーツ姿で魔車が来るのを待っている女性に、魔車が入ってきた途端に、数人引き連れて、声を掛けた。不良であるうか。世紀末が似合いそうな体たらくをしている。「やめてください、やめてくださいッ」

女性はイライラを通り越したヒステリックな調子で伸ばしてきた世紀末男の手を払った。ぱちん。すると不良は払われた手をわざとらしく、ぷらんぷらん、とさせてから、「あー、こりゃ骨折だわ。慰謝料請求してもらいたいわぁ」などとフザケタ言葉を連ねた。

女性の頭に殺意と危機感が入り混じる感情が溢れ、冷や汗となつて腋や背筋あたりで滲んで、今すぐに警察に連れ出して社会的に抹殺されやがれこの糞野郎、と思考したが仕事でいつも笑顔を絶やさぬためか、怒りとは裏腹に表情には貼り付いた愛想がある。それが不良男を調子に乗らせる要因となつて、腐った連中の嘲笑を容易く生んだ。

ニヤニヤと汚らしく、彼らは顔を見合わせる。

その嘲笑は不良男たちが押しを強めるといふ、仲間内での合図であつた。

女性は不良男の無駄に大きい掌に二の腕を掴まれて、魔車に乗り込む人の列から無理矢理引きずり出されると、「ちよつと話し合おう、ちよつと」と理屈にそぐわない言葉ばかりを言われて余計にイラ付かされ、混乱し、叫ぶのは億劫であつたので、手の届く所にいた正義感の強そうな男性のスーツの袖を必死に掴んだ。だがその手は埃を払うかのような男の仕草と共に、振り払われてしまい、女性は衝撃を受ける。

よくよく考えればあれだけ不良たちが騒いでいて、露骨に嫌がつている自分を他の人全てが見て見ぬ振りし、むしろ五月蠅いとも言いたげな、迷惑そうな雰囲気を出しているのはあまりにおかしい

と女性は察し、血液がスツと冷めるような不気味さを感じる。だからと言って何もせず不良共の思い通りになるのは不愉快であるから、素早く騒音魔法を展開し、発動しようとする。

だが何も発動されない。白いオーラが血液内を流動する魔法練成時の感覚が発生しない。おかしい、と再び思いながら、「もう離してください！」と不良男の手を引き離そうとして気が付いた。男の手が人間のものじゃないことに。黒ずんでいる腕……。

彼女は知っている。何百年よりも以前から復讐の沼で人間を手招きし続ける意気地無しの悪魔は歪ヒューという名に変わっても猶、かつては友でもあつた人間という種の生活を邪魔し、発展を妨げることばかりを念頭に置いて害世界で繁殖している。時に人を欺き、時に化け物の姿で人を恐怖させる世界の歪み。毛むくじゃらの熊みたいなのは漆黒の体表を持っていて、一般人の魔力では対処できない凶暴性や攻撃性を見せる。だから一般人はドームの外に出てはいけない。歪の怨念の餌食となり、骨まで貪られてしまうから……。

彼女も学校で口酸っぱく教えられた。害世界は瘴気が漂っているから危険です。その中でもとりわけ歪ヒューという負の塊であるナサケナイ悪魔が危険です。ドームの中は祈禱術で守られているから安全です。だから皆で都市の中、仲良く暮らしていかなければいけません。ドームの外では人間は生きていけないことを、忘れてはいけません。当時は嫌いだつた髪の毛がいつもぼさぼさの年配女教師が生真面に語っていたこと。暇さえあればそれを語っていた。彼女はそれを思い出して何故か泣きそうになる。

（先生ごめんなさい。でもドームの中で歪ヒューが出るなんて私、知りませんでしたよ……）

歪の腕は教科書の挿絵ではただ真っ黒なだけの棒切れみたいな形をしていて、それはそれで不気味で気持ち悪かったのだが、現実、目の前で腕を掴んでいる悪魔の黒腕は熊みたいに太くてごわごわしている。そして教科書越しでは伝わらない、圧倒的な、彼女の身をねじらせるような怨念。彼女は自分の全身が黒く染められていくよ

うな錯覚に陥り、ひどく不安になって、不安から逃れるためにひたすらに叫ぶ。吠える。お前は泥沼に沈んでいる、人間を巻き込むな、この人間の住処から出て行け……。彼女はひたすらに吠えるが、途中で口元を抑えられて叫ぶことすらさせてもらえなくなる。又ルツとした怨念が口から侵入し、すぐに全身に廻ったのだ。

吐き気が襲い掛かってくる。又ルツとした怨念を異物だと身体が認識したおかげだろう。吐き出すことを堪える理由は見当たらない。彼女は吐きたいという欲求に任せて胃液を逆流させて、怨念という又ルツとした黒ずみを口から吐き出す、つもりだった。

奇妙なことが生じる。それは嘔吐をしているのに怨念を吸い込んでしまっているという矛盾。嘔吐という逆流という手段によって気分を良くしたいのに、悪意を放つ怨念は、舌を通り、食道を通り、胃へと入り込んで彼女の全身に臭気をもたらす。なのに彼女は、おええ、おええ、と嘔吐しているのだから、やはり矛盾している。

一つだけ矛盾していない事実がある。命が歪イレイツによって吸い取られているということ。支配されそうになっているということ。全身が臭気を得るに伴って、人間ではなくなっていく自分があるのを彼女自身でよくわかる。いやだ、いやだ、と彼女は必死の形相で首を横に振るが、駄目だった。嘔吐に伴って怨念に支配される肉体。痙攣がはじまり、自らの意思ではどうしようもないほどにそれが激しくなる。びく、びくん、と跳ねる身体はもう毛むくじやらの体表を持つていて人の姿形ではない。彼女は歪イレイツになったのだ……。彼女の意識は暗転していく……。

だがそれは意識が現実より離れて、理屈が通じない虚空を漂う、つまり夢という奴であった。つまり幻ではあった。

しかし白昼夢を疲労が原因で見えたという訳でもない。それは歪イレイツという化け物の為せる、悪戯。人間への恨みは簡単にその生を終わらせない。彼女が見ていたのは夢だから、彼女は歪イレイツにはなっていない。だが、死は近づいている。

「きゃああああああああああああああ」

ホームに悲鳴が上がり、多くの人々の耳に聞こえるほどに、響き渡る。今まで不良男に引つ張られて騒いでいた彼女を認識した人はホーム内に一人もいなかったというのに、その悲鳴だけは全ての人間が聴き取った。そして、その悲鳴の、出所の位置が悪い。

「う、わ……」

彼女を見下ろす位置に丁度立っていた携帯魔通器を弄くっている男性は、突如視界に現れた女性を見て、そのように呻くことしかできなかった。今まで砂利と線路しかホーム下には無かったのに、突然に上半身だけを露出した女性が、これから魔車が通過するはずの線路上に尻餅をついていたのだから、そういう反応にもなる。

もちろん、男性には何故女性が乳房をむきだしにしているのかわからないし、まばたきをする前には確かに砂利しか目の前には無かった、という記憶もあるのだから、違和感が湧くのは当然だ。だが戸惑っている時間はあまり無い。女性は明らかに呆然自失といった様子をしていて、自分で歩けそうな様子ではない。目が宙を泳いでいる。男性は彼女に手を貸す必要があることを悟り、携帯魔通器にばかり向けていた意識を、彼女を救出するという行動へとシフトさせる。

携帯魔通器を懐にしまつてから、男性は現在がホーム内に電車が入り込んでくるタイミングかどうかを確認するために右や左を眺めた。しかし、どうすれば良いのか、とあたふたしてしまうことを抑えられず、やっとこさ言葉がまず飛び出て、出た言葉は、あぶないですよッ！、だ。

そして叫んでから男は眼球で捉える。上半身をむき出しにしている女性の下半身側から、黄色らしき液体が流れ落ちて、漏れ落ち、砂利の石を濡らして黒く染めている光景を見下ろしたのだった。男はわずかな間、その突然のお漏らしに気を取られはしたが、すぐに気を取り直し、線路内に飛び降りようとしたが、もう一度右を見て絶句する。ミストボディという珍しい現象を起こした状態の魔車が、いまや小水をなみなみ零している彼女に向かって先端のライトを光ら

せていたのだった。減速する気配は、何故か、無い。

「見えてないのか！ 誰か、駅員さんを！ ていうか、線路に人がいます！ 魔車を止めないと大変なことになります、誰か、駅員さんを！ もしくは……」

だがそこまで叫び終えてから、男性は魔車を止める時間はもはや無いであろうことを悟る。彼の頬さえ照らされるほどに魔車はホームに接近していたから。男性はもうどうしようもないのか、と焦り、隣に丁度立っている、口をあぐり開けているだけで手に持っている鞆すら落としてしまっている年配の男の肩を掴み、ゆさゆさと揺さぶった。だがそんなことをしても仕方がない。わかってはいるのだが、彼にはもうそれしか出来ない。

間に合わない！

「ごキュんツ、という肉片や骨のむしられたような音が鳴る。

男性は両手で顔を覆い隠し、一人の女性を救えなかった自らを嘆くかのようにその場で崩れ落ち、ごめんなさい、許してください、と口早に叫んだ。

その男性の許しを請う叫びが掻き消されるほどの喧騒がホーム内を包んだのは、ほとんど全ての人が「キヤアアア」という女性の吠えが発された理由を悟って動揺したからで、互いに顔だけ知っていて話したこともない隣接している出勤者と、ナニガアツタンダロウ、と何が起こったのか見当は付きながらも、黙っていることも出せずに口走る。人の命が魔車に轢かれて失われたのだろう、ということ、大体みんなの解答は辿り着いていた。

世も末だな…… 仕事に遅れる…… 一体どんな人が死んでしまったのだろう…… 死体は見るも無惨な状態になっただろうな…… はあ、また自殺か、それとも事故か…… 今朝のニュースと合わせて鬱にされるな…… ったく今日は忙しいってのに…… 明日は我が身かもな…… ひどい音が鳴ったもんだな…… なんて誰も助けなかったんだろう……？…… 痛かったかなあ……

様々な人間の思考が一時、一人の今しがた死んだ人間と魔車が引

き起こした事件に集束していたが、誰もさほどの興味を示してはいない。また起きたかこういうの、というウンザリ感さえ生じている者もいる。実際、最近では自殺者が多く、魔車に飛び込んで命を自ら落とすということは近年目立っていた。理由は、破滅の恐怖から逃れたいという思いから。

今朝のニュースもそれに関連することではあつて、ゆえに人々は憂鬱な者が多く、魔車に飛び込んで死ぬ者が現れてもおかしくはないと予想していた人は多かった。が、自分の通勤に影響を及ぼすかどうかはわからなかったそれらの人々は、今しがた起きた事件によって遅刻をすることを確信し、ため息を付いてから携帯魔通器を利用した。通う会社や学校の上司や友達に連絡を入れているのだろう。だが、それは早計だった。

「生きてる、生きてるうー！」

携帯魔通器のディスプレイを弄くつて連絡を付けようとしていた全ての指が動きを止める。ホームでへたれている男が、安堵のせいか、或いは歓喜のためか、ぼろぼろ涙を流して大声を張り上げているのだった。その男が見ているのは魔車が停止しているその先端。つまり女性が肉片を砕け散らせて死肉と化している所のはずであったが、男は感涙しながら生きてるうーと叫んでいる。そうつまり生きていくというのだ。

そういえば、と誰かしらが気が付く。

魔車はすごい勢いでホーム内を通り抜けようとしたのに、今自分たちの目の前で停止している。それってつまり、止まったということ。あの速度で、急停止をしたということ？そんな馬鹿な。でも現実、魔車は止まっている。魔法の力が……。だが魔車には魔法の力を受け付けないマジックコーティングが為されているはず。通常、一般人の魔力の影響や悪戯を受けないように、それは常に起動しているはずなのだが……。ならば、物理的な力で止まった、とか？あの速度が？

信じられない、と誰かしらは、若い体を敏捷に動かして人の渦を

潜り抜けて、電車の先端部分がどのような有様になっているのかわか
に行く。自分の目で見なければ信じることが出来ない、と。そして
目に入ったのは、黒色のハットを被った筋肉質の男。少し癖のある
赤髪を肩辺りまで伸ばして……鋭い赤眼二つと大木のように太
い両腕を、魔車の先端部分に押し当てるようにして置いている。そ
の赤髪の男の背後に、「キヤアアア」と絶叫していた女性が横た
わっていて、茶色の毛布らしきを掛けてもらった状態で、砂利に横
たわっていて、意識が無い。

魔車を急停止させたのは光景から見て、その赤髪の男の両腕と見
て間違いは無かった。めり込んでいるその掌辺りから、煙らしきが
わずかに立ち昇っていて、車体を纏っている霧と混ざりこんで消え
ていく。本当に物理的な力、らしい。魔力ではこのようにはいかな
い。コーティングで弾かれてしまうから。この輝度の高い赤髪を持
つ身長の高い筋肉質の男が、魔車を力でねじ伏せたということだ。

若者は目を見張って、そのあり得ない存在を眺めた。そしてすぐ
に理解する。このようなことができて、しかも輝度の高い赤髪。こ
んなことが出来るのは之史以外にはこの世にいない。セキドウ出身
の”六希”の一人、赤髪の男、之史に間違いない、と。

彼は両腕の掌を魔車から離すと、痛みなどこれっぽっちも感じて
いないのだろうか、ふう、と一つため息を付いてから後に、横たわ
っている命が救われたばかりの女性をお姫様だっこで拾い上げると、
安全な上側に身軽に跳躍して足をつける。

「朝っぱらから、俺は幸運だ」

若者は、之史の言葉を聞いて、渋い声だなあと思った。歪ヒルと何度
も生死が関わる戦いを繰り返すと自然とこういう男前になるのだろ
うか、と大男の全身を思わず上から下まで一瞥してしまう。サイ
ンでも貰えないかな、と思っただが、之史の鋭い赤の両眼に横目がち
で射られると、恐縮してしまっただけ何も言えなくなった。それでま
ごしている内に、何時の間にか女性をスツと手渡されていて、若者
は、え、え、と余計にまごまごしてしまいそうになったが、何とか

表情や姿勢などは冷静を保つてみせて、その冷静ついでに一つ尋ねることも出来た。

「一体、どうしてこんな平和な都市にあなたが？」

すると之史は若者を射ていた赤の両眼を何処かしらの宙に向けて、ハットの鍰を少し上げて視界を良くするような素振りをしてから、相変わらずの渋い声つきで、言った。

「……………あそこ、見てみる」

之史が人差し指を一箇所に指し示すので、若者はその位置に顔を向けてみるのだが、今度こそ冷静さは保てず、あつ、と叫んで口をぽかんとさせてしまう。大きな穴があった。

「歪ヒューがヒューいる所になら、俺は何処にでも現れる。あいつらは、全て俺が殺す。お前ら少しでも邪魔しないでくれよ……………まあ、難しいだろうが……………」

大きな穴は漆黒の穴。突然現れた六希、之史の言葉を聞きながらもその大穴を見ている若者や他の人間たち。

すると、若者の心の内側にどす黒い感情が駆け巡った。自らでも驚くほどの禍々しい感情であり、憎悪に近いむかむかとしたイラつき。邪魔してやる……………之史の邪魔をしてやる……………と突拍子もなくそんな意思が芽生えて、之史の後ろ姿に手を伸ばしてしまう……………。それは若者だけではなかった。漆黒の大穴を見た者は全て、之史を邪魔しなければという突然たる意思を己に抱えた。だからそれから幾重もの魔の手が、いや魔に操られし手が、之史に一齐に向かつていく。それら一つ一つが五十キログラム以上の重量を持った圧力の壁である……………。

だが之史は、一喝を浴びせるかのような足踏みをハットが吹き飛ばさないように片手で抑えながら一度、どおおおおおん、と地響きが生じるほどに床に向けて叩き付けるだけで、それら魔に操られし人々の目を醒ましてみせた。赤のオーラの波動が、人々の精神状態を通常のモノに戻したのである。赤のオーラによって我を取り戻した人々は夢から覚めたばかりのように戸惑っている。

そんな彼らに向って、之史は怒声を放つ。

「お前らこの駅から出ていけ。今すぐにだ。そして自分の身を一日守り抜くことだけに気を張って、命を守れ。これから八ク口（ハチク）に歪（ヒュー）が大量に出現する。今日はドームの結界が瘴気を遮る程度しか出来なほほどに弱まり、歪（ヒュー）どもを無料で通す羽目になる。わかったな。俺は説明とか苦手だから上手く伝わったかわからないが、お前らには助かって欲しいから言っている。ほら、何してんだ早く、……逃げろっつってんだろっが！」

再び、どおおおおおん、と強烈な足踏みが床に叩きつけられて、ヒビが入ると共に赤のオーラの波動がホーム内を駆け巡る。その威圧的でもあり先導的でもある力強さに影響されて、人々は力ある足取りで、一目散に逃げ出した。一瞬にして場は混乱し、修羅場と化した。迂闊に一度でも足を滑らせて転べば、ドミノ倒しで多くの命が奪われてもおかしくない混乱と、密集。

だがやがて、全ての人々がホームからいなくなる。先ほどまでの騒ぎが嘘であったかのように静まり返ったホームで、黒色ハットの赤髪の大男、之史は威風堂々、何に臆する様子も見せず一人その場で立っている。だが漆黒の大穴が気配を増し、ブラックホールのように巨大な暗闇となってきた時に、静かな怒りを秘めた様子で、言葉を発した。

「歪（ヒュー）共……消し飛ばされる用意は、できてるな」

その言葉は通じたのだろうか。

ヒヒッ……という呻きが虚空より響いた。

L i l i i とヒグ

之史が駅にて一般人を非難させた時。つまりハクロ都市内に現れた歪イビツと対峙している時と同じ頃。まだ歪イビツがドーム内に侵入したことも知らず、奏でられる滅茶苦茶で音程の崩れている声を、五百人の人間が目を瞑って聞いている。

駅のホームから約十キロメートル離れた位置にある演奏会や上映会などの時に利用される会館の大ホールにて白髪の少女L i l i i は歌を歌い続けていて、息を切らすこともなく、休憩を挟みながらではあるがずっとピアノの伴奏に合わせて歌い続けていた。ピアノの鍵盤で緩やかな音を奏でて、それなり、無難な音をホールに響かせているのは金髪の少年、ヒグ。L i l i i とヒグ。

この二人も”六希”と呼ばれる特別な人間だ。今は演奏会の主役として、平凡な伴奏と、滅茶苦茶な歌声をユニゾンさせようとしているのだが、当然聞くに耐えられない音楽が紡がれている訳であり、それはもはや音楽というよりか、音辛とでも言いたくなる演奏だ。だが白髪の少女と金髪の少年は、奏で続ける。五百人の、目を瞑って演奏を聞く、額にうっすらと汗を掻いている観客たちに向けて。
(まったく、相変わらず奇妙な感じだよな)

ヒグはピアノを弾きながら思う。そして音痴なL i l i i のその横顔を盗み見て、ああ彼女はやっぱり綺麗だなあ、可愛いな、と惚れ惚れ思つて、手元を狂わせそうになる。あぶねっ、とヒヤツとした一度でも失敗すれば演奏は今現在もおかしいのが、もう取り返しの付かないほどに理解不能な代物になってしまうとヒグはわかっている。何度弾いてきたこの演奏を一度でもリズムを狂わせてはならないと自らの胸内で再確認して、集中する。鍵盤を叩いた。

定期的に行う、演奏会のための伴奏。音痴なL i l i i は世界の希望の象徴であるが為に、彼女が歌いたいか歌いたくないかは関係な

しに、五百人という観衆の目前で、こうして約二時間ほど歌を歌い続けなければならぬ。何時から決まっている習慣なのか、どうしてこういうことをしなければならぬのか。納得しづらい理由しかないけど、彼女が歌を歌うのを拒んだことはない。こんなに下手糞なのに。聞く人が暑くも無いのに汗を掻く程なのに。

彼女だつて自分が音程外しだということを理解しているはずだつた。だがリーイが口でハッキリと歌いたくありません、と言つたことがあるのを、ヒグは聞いたことが、幼い頃から一緒なものにも関わらず、一度もない。教育係のおばさんとかに愚痴つたことさえ無いのではないかと推測できる。

ヒグはリーイが好きだ。音痴な歌をみんなに聞かれたつて空しくなるに違いないのに、文句一つ言わず、音程が駄目ならばと音量だけは上げて大声を発するリーイの懸命さが好きだ。昔、ヒグが走つてる途中で転んで泣いた時、真つ先に消毒液とガーゼを持って駆けつけてくれたリーイが好きだ。あえて祈禱術で癒すのではなくちゃんと普通の人ができるような傷の治し方をした方が世の中のことを知ることが出来る、世の中の人々の気持ちを知ることが出来る、という教育係のおばさんの言うことを真に受けてガーゼと消毒液という手間をかけてくれたりするリーイが好きだ。ヒグは、十数年前から変わらずリーイのことが好きで、それは恋とはまた違つて、彼女と付き合いたいという感情とは違つて、一言で何と表現して良いのかわからないがとにかく好ましい、彼女と一緒にいたい、彼女の助けになるようなことをしたい、彼女が幸せに生きていけるようにサポートしたい、という欲求で、それは十数年前から、多分消毒液とガーゼを持ってきてくれた時辺り、からずつと変わらなくて、間違いなく好きだつた。ヒグはリーイが好きだ。だから彼女の伴奏は誰がやるかという話しになつた時も真つ先に自ら申し出て、由観見や之史にからかわれはしたが、ねこ踏んじやつたすら引けなかつた所から練習をひたすらにし、演奏会で聞くに耐える上手さのピアノ技術は習得してみせた。その成果あつて、ヒグは演奏会の時に

はLiiの助けが出来るような感覚を味わえて、もうそれだけで気持ちが充実して、一日中機嫌良く生きていられた。それはこれまでそうだったし、これからもそうだろう、とヒグ自身思っている。

Liiは祈禱術という才と六希としての役割を兼ね揃えているがために、世界のために生きている。そしてヒグはそんな重荷を背負って生きているLiiのために、心臓を鼓動させている。生きている。

そう考えるだけでヒグは幸せであり、実現できればさらに幸福に満たされる。それが金髪の少年、ヒグである。六希の一人。身長百三十センチメートルほどの、幼い姿形を持った少し癖のある髪の毛の、十七歳。身長が低い人には、理由がある。

ヒグとLiiは演奏を続けた。反射しては小さくなっていった耳では捉えられなくなり消失していく音の連続は連続しては、全て消えて行く。目を瞑って汗を掻いている人の耳に届いた音もあれば、届かない音もある。ただ全て消えて行くことは同じ。音は紡がれるだけじゃなくて、紡がれた後には失われるもの。だから演奏会は貴重がられる。音はその場で踊り、くたびれるから。

山場にさしかかり、演奏を力強く奏でる必要が出てきた。ヒグは金髪の髪の毛を活性化させて、能力『金剛』を発動して自らの神経を鋭敏化。さらに筋力も強化し、全身に黄金色のオーラを纏わせる。ピアノの鍵盤を流れるように指で押し、ペダルを踏んで、耳でLiiの歌声を聞く事も忘れない。鋭敏化している神経で音程を外している彼女の大声を聞くのは辛いところもあるが、いつものことだ。演奏会では、演出の意味合いも兼ねて活性化をするのがいつものこと。横目でLiiの方を見ると、彼女の髪の毛も銀に近い白色に発光していて、雪のような粒子をホール内に降り注いでいる。これはLiiが演出用に編み出した綺麗なだけの、見映えのための『白露』だ。本来はこういう能力の使い方は対歪戦時^{イレック}などにはしないのだが、こういう催しの時には人々を楽しませるための形で能力を

使用する。本来白露は、歪み（イビツ）の前進を妨害する障壁を地面から発生させる能力。その障壁を作る際に必要な白のオーラを分散させて雪のような結晶と化させ、天井から発生させ、降り注がせているのが、今、Leeiがしている行為だ。

今まで目を瞑っていた五百人たちの眼が開いた。

そして彼らは黄金に輝きながらピアノを弾く少年と、天井から雪を降らせながら音痴な歌を大声で歌い続ける少女を、視る。

彼らの内の幾人かが、涙を零した。雪は降り積もることはなく、誰かの頬に触れては皮膚から入り込んで優しく溶けていく。五百人たちは結局、これを楽しみにしていた。

希望を持った安らぎ。その結晶がわずかに自らに触れてくれること。

涙を流す人は顔を俯かせて、音痴な歌を聞き続ける。

汗を掻きながら。そして、涙を止められない。

この演奏を耳にするために会場にやってきた五百人は平和を望んでいる人の割合が多かった。だから世界を救ってくれる象徴である白髪の六希、Leeiの歌が音痴であろうが、聞きたいと思って応募した中で幸運にもそれが通った五百人だ。その彼らに降り注いだ白い雪は優しくかった。優しくて身に滲み、どうか不幸が訪れませんかのように願いが込められる。が、彼らの願いは即席のカップラーメンのように直に叶えられることを目標とする、浅はかとも言え換えられる代物、とも言える。そういう訳で白い雪は一時凌ぎの安らぎを彼らに与えはするが……。

それだけだった。そして、演奏がもうすぐ終わろうとしている時に大ホールに入るための入り口から、自重していない騒々しさで一人の男性が現れてこう叫ぶ。

「歪み（イビツ）が！ あと、赤い雪が天から落ちてきた！」

白い雪ではなく、しんしんと赤い雪。

ハク口は平和な都市であったはずなのに、と静かに涙を流していた人たちが、今度は恐ろしさに耐え切れずに涙を零し始めた。その

彼らの頬にはもう白い雪は落ちてこない。演奏は今しがた終わり、ピアノを弾いていた金髪の少年と、音痴な白髪の少女は、ライトアップされていた舞台から煙のように消えていた。

取り残された五百人たちはしばらく呆然とピアノだけが置かれてある舞台を眺めていたが、誰かから発された悲鳴を契機に、一目散に何処かへと逃げ出す。

大ホールから五百人はすぐにいなくなり、静寂とピアノだけが取り残されて、もの侘しい。

由観見

滅紫色の暗雲がむくむくと空を棚状に覆い尽くしている。赤い雪が絶望時間開始の引き金をひくかのようにしんしんと降り積もり、ハク口の整備されている道路を血のような黒ずみで満たしていく。都市が紅に染まるうとしていた。人々は赤い雪を避けて、建物の中に避難している。

怨念の降下。平和だった都市にへばりつく。そして紅に染まっている地面からドロドロと湧き出てくる猿の形をした深緋色の怪物たち……赤緋猿と呼称される歪……それらは多くの都市に住まう人間が教科書で見たことのある一般的な歪姿と違って毛むくじゃらであり、黒色ではなくて深緋色。ドロドロとしながら、両眼の怪しい輝きで周囲をギョロギョロと窺い、標的を探す。人の血肉の匂いを……。歪は臭気で獲物を見つけ出す……。ビルや家、橋の下やマンション。とにかく赤雪を避けて避難場所を選んだ人は、壁なども這うようにして登ってくる歪に見つけられて、顔全体を大きな牙が何本も生えた口に変形させる怪物に、上半身ごと持っていかれる。血がピュー、ピュー。命が失われてしまう。キャアアアアアとか、どうしてええええ、とか、いやああああ、とか阿鼻叫喚がそこら中から発されてハク口の都市は先ほどまでの平穏が嘘だったかのように、本当の悪意溢れる現実が姿を現したかのように、喰われて、喰われて、喰われる。血が舞う。人間の体内からの血液がそこら中に飛び散り、スプラッタな光景はB級映画にも使われなさそうなほど陳腐でありながら、真実でありノンフィクション。歪の侵入をハク口は許してしまった。

たとえば、ひとつの家族がいた。

旅行をしようと出かけた途中で、紅の雪に遭遇した。父親は車の中に入り込もうとしてくる歪を魔法で退けて妻や子供たちを守りつつ、生き延びるための逃げ道を探す。だがすぐに囲まれてしまう。

黒ずんでいる血たまりから次々に溢れ出てくる怨念の猿。逃げ道はアツと叫ぶ間もなく塞がれて、子供達はアー！と逃げ道が塞がれたことを嘆く。妻は真つ青でありながら猿たちを睨むが、せせら笑いの嘲笑のようなヒヒツという余裕を返される。その余裕綽々な様子の相手に怒りの火の玉。魔法をぶつけたが、少し靄に視界が悪くされたみたいの様子をするだけで、
歪たちはほとんど一つの家族に迫ってくる。匂いがするのだろう。家族達のおいしそうな幸福の臭気……。

「たまの休日にせっかく自動車が直ったっていうのに、何なんだよこれ天気予報にはこんなこと書いて無かったつづつもの！」

「一日中晴れって言ってたけど、曇りね。一番曇ったのは、私達の心だけだ」

「誰が上手い事を言えと言ったあ！」

「お母さん、お父さん、死にたくないよー」

「おーよしよし。お前達とはにかく逃げる。俺がここは食い止める」
男気を見せるように腕まくりする夫。だが妻は知っている。この夫は真面目に学校で授業を受けてこなかったから、中学生でも出来る魔法をこなせない。あるのは腕っ節だけ。腕っ節で歪を退けられるはずはない。できるのはせいぜい……。

「あなたは子供たちを抱えて今すぐに逃げて！ 私は魔法に関して超優等生だったんだから！」

「お、おい……」

「性別で役割を決めるなんて古くて固い考え方！ こういう命の危険が迫ってる時には、男も女もないんだから！」

「そんなことはないだろ！」

「うるさい！ こんな糞みたいな猿どもに笑われるだけ笑われて逃げだなんて私には無理！ こいつら一人残らず私の鍛錬の賜物で、蹴散らしてやる！」

「だが、やはりお前を一人にはできないのは当たり前だろうが！」

「じゃあ子供たちが死んでもいいんだ！ あんたが男のプライドに

こだわって息子や娘が死んだら私はあなたと離婚するし、離婚した後も嫌がらせをし続けるよ！」

「ふ、ふざけんな……」

「はやくしないと！」

「……………」

夫は両腕に子供二人を抱きかかえて、妻の方を気にしている様子をしばらく絶やさなかったがふと記憶を掘り起こす。それは自分たちが初めて出会った時。夫は今までその時のことを忘れていて、以前思い出そうとしたけど結局思い出せなかったこと。彼は不吉だと感じた。こんな緊急時に普段思い出せないことを思い出す。まるで妻と今生の別れが迫っていることを語っているかのような錯覚が生じ、走ろうと思っていた足が止まってしまう。息子が困惑している、娘が妻のほうへと顔を向けて大声で喚いている。おかーさん。夫は思った。やっぱり、なんか違い！

「！ 馬鹿なことは止めないと駄目」

一人の人間として積み上げてきた鍛錬を使って悪意の歪セキレサルを焼き尽くそうと魔力を練り込んでいた妻の横で、子供を抱きかかえたまま仁王立ちをする夫。いや、邪魔だから。何してんのお前？頭悪いの？そう思わざるを得ない。

だが妻の思いとは裏腹に夫はドヤ顔をしていて、歪セキレサルたちを見回しながらこう言った。

「俺の脳内では、今日の天候は馬鹿みたいに晴れ上がっている」

「私の脳内では、今日の天候は馬鹿のせいで大雨注意報が出るよ」

「気のせいじゃないか？」

「気のせいじゃない！」

「おい、危ない！」

「あ」

今まで襲撃のタイミングを見計らうようにして、牽制らしき動きをしていた歪セキレサルのうちの一匹が跳躍、一つの家族の妻に向かって足蹴を放ち、会話をしていたせいで気が紛れていた彼女の腹に直撃。彼女

は、うつ、と腹を抑え込む。その隙を逃すまいと追撃をしようとする他の歪セキヒザル。だが、その彼らの前に、子供を抱えたままの夫が立ち塞セキヒザルがった。

歪セキヒザルたちは立ち止まってしまった。なんてことはない、ただ一人の男性が子供を抱えているから両手が塞がった状態で壁となつていないに過ぎない。少し蹴り飛ばせば、クリアできる障害だ。だが歪セキヒザルは男性を睨みつけてはいるが、様子見の停止。間合いを測る他なく、しかも動揺もわずかに生じている。

ただの馬鹿のはずであつた。だが歪セキヒザルは、そのあまりの理に叶つていない馬鹿さ加減が理解できず、戸惑い、何か底知れぬ薄気味悪さを察知したから、結果、彼らは様子見を選択したということである。まさに無策。何も考えていない頭が歪イヒツたちを自らが王族の生まれの人であるかのように眺め回している様は、裸の王様のような滑稽さが発生しておかしくないはずなのに、歪セキヒザルたちは何に脅威するのか様子を見るのか。その極端な馬鹿さが信じられないということである。

勿論、こけおどしのようなものであるから、すぐに歪セキヒザルたちは冷静さを取り戻すと夫を足蹴にし、吹き飛ばした。夫は何とか子供たちを手放さないようにしながらだが、無力なことにはずざざーと吹っ飛んで、足を捻つて立てなくなった。

(や、やくたたず……)

さすがに妻、そう思う他なかつたが、その間に体制を整え、魔力も練り込み終わった。彼女の右拳が白い光に包まれて、飛び掛つてきた歪イヒツの腹辺りにカウンターを決める。その結果、一発の歪セキヒザルを抹殺するに成功した。やはり一匹一匹はたいしたこと無い、と群れる歪セキヒザルは一匹ずつ対処すればイケるかもしれないと思つた妻であつたが、それは誤認識。

数が多すぎた。

天の滅紫色の棚状である雲より降り注ぐ赤雪が地面に染み込み、黒ずんで闇が芽生える。

その闇から生えてくる歪^{セキヒザル}たちは一体一体は小さく非力ながらも、無限に湧いているのではないかと思える程に増殖する。恐ろしい繁殖力。一々光る拳で殴っていたら、先に拳のほうに疲労骨折する。妻は数匹殴り殺した辺りで呆然とした。連中の数は、時を経るに伴って増えている……。無数の怨念。消えない怨念……。

子供のことを心配し、夫のほうを見ると三人が歪^{セキヒザル}数匹に覆いかぶさられてナニカヲサレテイル。妻は得体の知れない歪^{セキヒザル}たちの行動に絶句し、慌てて光の拳を放つことでそれらの歪^{セキヒザル}を蹴散らした。そして三人が気絶してはいるが命は失っていないのを見て、安堵し、三人を抱き寄せたまま、しばしうずくまる。そして再び顔を上げた時には、三百六十度を歪^{セキヒザル}の集団に取り囲まれていた。逃げ場は完全に失われている。死の覚悟。

だがふと瞬きをした時、いつのまにか、宙に浮かんでいた。空中に浮遊している。歪^{セキヒザル}に見下ろされていて、あんなに大きく威圧的に見えていたのが、瞬きをする間に彼らを蟻んこのように見下ろせている。上空。赤い雪が降る大空に、そんな力は持っていないはずなのに浮遊していた。そして妻は視界の隅に、燈色に燃えて輝くような両翼を捉える。

自分の背中から小振りではあるが、燈色の羽が生えている。だが羽が生えているのは自分だけだ。子供たちと夫が落ちないように、妻は力強く夫の両脇を持つ。羽のおかげか、夫という一人の大人を持っているのに重さを感じない。そして妻は少し首を曲げて、振り返り、視る。自分たち三人を助けてくれた、上空に引つ張り上げてくれた存在。燈色の羽という時点で大体予想は付いてはいたが、まさか彼女がこの都市にいるはずが……という思いもあるのですが、かに信じられなかった。だが、振り返って視てみれば、大きな燈色の両翼を背中から生やす一人の女性、燈色の髪の毛を持ち、燈色の両眼を持つ、『燈火』と呼ばれる能力を使う六希の一人、由観見の姿を確認したのであった。

(あ、薄情女)

六希のうちの一人である由観見。燈火を扱いき、一度の出来事で世間のなかで陰口を言われやすい対象となった者。ビッチだとか薄情女だとか、鬼畜だとか、不細工だとかいろいろ言われる彼女であるが、そうやって彼女に対して悪口が世間に流れるようになったのは、一つの映像がキツカケである。

（あの嘲笑うかのような、視聴者を手玉にとってご満悦に浸っているかのような、大きな笑い！）

妻は思い起こす。たまたま彼女も問題になった映像を見ていたのだ。いわゆる生放送という奴であり、六希の一人である由観見は番組内でゲストとして出演していた。妻はその時のことを思い起こし、助けてもらったにも関わらず複雑な気持ちになった。その複雑性は恐ろしく邪悪な代物で、多くの人の複雑性が積み重なっている厄介な悪い感情である。

もうあの笑い自体に怒りを感じている人は少ないかもしれない。ただ、ただ由観見を見ると多くの複雑性を抱えた人々は思い出すのである。当時散々に陰口を言い放ってやった相手に対する、さすがにやりすぎたかな、という感覚と、でもやはり彼女があんな下品な笑い方さえしなければ叩かれなくて済んだんだ、という感覚。実際、彼女がそこまでひどいことをしたわけではなかった。ただ問題なのは、それが多くの人に見聞きされ、伝聞し、人々の生活の鬱憤が乗っかり、ひどく人々の汚らしい部分はその事件がきっかけで生じ、由観見という人物はその事件を思い起こす鍵としての人物になったということ。だから世間は彼女をあまり良い思いで見られない。それはこの一つの家族の妻も同じである。彼女は、離れて、と叫んだ。背後にいる由観見に対して、離れるわけがない上空だというのに、離れて！ と繰返し、上空という不安定な場所で絶叫するのだ。絶叫しながら振り向くと、そこには恐れ多いほどの美人がいる。由観見はスタイルが良く、男受けが良い、に加えて何処か生意気な顔つき、生意気な仕草をしていて妻は彼女のそういうトコロも気に食わなくてイライラが募る。さらに『燈火』の能力には羽を羽ばたかせ

ること、風に乗る鱗粉のようなものを発生させ、歪ヒューを匂いで惹き付ける効果があったりして、そういうトコロも媚びを売る人の象徴のような気がして、嫌いとは行かないが、何故かイライラする（誰だつて、あんたみたいな軽薄女に命を助けてもらいたくないんだよ）

妻はイライラを処理するために脳内で悪態を付いた。そうしている間に、気を失っている子供や夫も合わせて、十階立てのマンションの屋上に降ろされる。そこにも赤雪は降るから、歪セキシザルたちは発生していた。

思わず妻は叫ぶ。

「私たちをこんな所に降ろして！ 死んでしまっ！ 最低！」

不覚にも涙ぐんでしまっ。涙ぐんでから、自分が軽くパニックに陥っているのだと気が付いた。

だから何やら様々な罵詈雑言を吐いてしまっ。燈色の羽を生やしている六希は、うつすらとした微笑みを浮べながら、その妻を眺めている。妻は腹が立った。昔の映像のことを思い起こす。小馬鹿にしていやがる！ そう悟り、罵詈雑言をさらに浴びせたが、ふと、今まで滅紫色の暗雲で閉ざされていた太陽がかすかに隙間を縫って都市内に日射を降り注がせた時。燈色で纏められている彼女にもその日射が辺り、彼女の燈色の髪の毛がより光を放ち、燈火の羽も何か情に訴えかけてくるような、光を反射させて煌く鱗粉を羽ばたくこととでこぼしている。

綺麗だ、と妻は思った。単純に、綺麗だ、と思った。

あまりに悔しいほどに綺麗だった。罵詈雑言が思わず止まってしまうほどの美しさだった。わずかに顔を出している太陽の光が、彼女の後光であるような錯視さえ起きる。屋上のフェンスの上に両足をつけて羽を羽ばたかせている彼女は、ただうつすらとした微笑みを発して立っているだけにも関わらず、あまりにも整い過ぎていた。その色香が歪ヒューを惹きつけ、そして世の人間たちを惹き付けるんだ。と、妻は思考した。

妻から見て、由観見は髪の毛の右側だけを結っていて束にしている。その結うために使用している赤色の髪飾りが、彼女の燈色の髪の毛によく似合っていた。左側は右側と比べて長く伸ばして、艶があり、燈色の輝きが眩しい。切れ目のあるドレスを着ていて、その切れ目から伸びる足はわずかに肉付きがありながら長く、モデルとして雑誌に何回も載った事だけはあると実感させられる。そして、眼。二重のパッチリとした眼に、くるんと長いまつ毛。そして意志の強そうな眉と、自信のありそうな態度。その彼女の微笑み。妻に沸いてくる複雑性。

「はやくその媚売るような臭いで、連中をあなたが一人で引き受けてくれないと皆死んでしまうでしょう？ 私たちを屋上に見捨てて、またあの映像の時のように、邪悪で下品な大笑いをするのかしら。それがあなたの本性でしょう？ みんな言ってるわ、あなたが性悪で軽薄で、ビッチで、誰にでも色香を振りまく最低女だつて！」

よくそこまで罵倒の言葉が浮かぶものである、と歪ヒキレザルが引いてもおかしくなさそうな程の連続される暴言であった。それはただ単に由観見が嫌いだからという理由で発された言葉ではない。いろいろな不安や怒り、そういう感情が滾って、発散のために連なってる言葉なのである。

由観見がフェンスから降りて、羽ばたきながら屋上に足をつける。片足がついてから、ゆっくりともう片方の足もつけるといふ、優雅な着地の仕方。

「……！」

そして、妻の頬を叩いた。強い力で、ぱしんと。急なことに驚かされる妻。見上げた先の燈色の女性の顔はさっきまで微笑んでいたにも関わらず、怒りが溢れていた。だが、その恐ろしい表情は一瞬だけのことで、妻がひりひりする頬の腫れを感じて瞬きをした頃には、すでに冷静さを取り戻したのだろうか怒りのそれがあったことが嘘のように、平然とした顔付きの由観見がいる。

そして彼女は彼女に何も言わなかった。

何も言わないまま、彼女は羽から色香の鱗粉を撒き散らして、歪セキヒザルたちを色仕掛けのようにして誘う。歪セキヒザルたちはその強めの匂いに惹かれて、怨念をそこら辺にいる人間に撒き散らすことを中断し、燈色の羽を生やす美女に引き寄せられていく。

ドーム内に次々現れる数え切れない歪イビツたちの全てが、彼女の鱗粉に惹きつけられようとしていた。それは『燈火』の能力のおかげ。

だが一つの家族の妻として生きている彼女。屋上に家族ごと放り投げられて救出された彼女は、

どうしてもその能力が、彼女自身の持つている美貌のおかげのように見えて仕方がない。

そしてそうやって冷静な判断が出来ない自分に、苛立ち、複雑へと化していく自らのごちゃごちゃとした心情で、どんどん遠くなくなって行く由観見の後姿を眺めていると、命が救われたことに安堵することはできず、歪んだような感情ばかりが胸内から溢れてくる。叩かれた頬をつねってみてから、彼女は赤い雪がしんしんと降るのを止んだことを知る。

何だかんだ、助けられたんだ、とそこでようやく実感して、何故か悔しくなる。

八つ当たりに、気絶している夫の背中を、軽く蹴り飛ばした。

『青嵐』は発動者の周辺が自然環境として清浄であればある程、その能力としての効用を上昇させる。清浄である、ということはどういうことかということ、歪イビツが好む環境の逆ということである。色鮮やかな花畑や、濁りの無い透明な水の流れ、さんと降り注ぐ太陽の光、澄み切った空気。『青嵐』発動時に、発動者の周辺にそういった環境が整っている分、能力は強力な状態になって敵を切り刻む欠点は、『青嵐』を使ってしまつと環境を破壊してしまつ可能性があるという点。刃の嵐が植物を切り裂いてしまつたり、土砂崩れを発生させたり。天候を悪化させることすらあり得る。だから多用は辛いし、周辺にいる仲間を巻き込んでしまつことも多いために、強力ではあるが扱い辛い能力と言える。

それをサポートする役割として『緑地』の能力はあるとも言える。元々は歪イビツにとって不利な環境を生み出す能力ではあるが、そのために花畑を一瞬にして作り出したり、瘴気などが漂う空気も澄み切つた大気に変貌させてみせる。そういった環境は歪イビツにとっては人間が瘴気の中だと病気になるってしまうのと同様、生き辛い土地なので。枯れ果てている大地を潤いに満ちたお花畑にして、吸うだけで人間の肺が犯されてしまう汚らわしい瘴気の世界を、まっさらな潔白に戻す。自然の活性化を促す能力が『緑地』であり、活性化している自然の力を分けてもらつて刃の嵐を捲き起こすのが『青嵐』ということである。

よつて、『緑地』と『青嵐』は合わせて戦術利用すると有効。弥生とフェルチー・F・トラバス（仲間内からはフェルトと愛称される）は幼い頃から『緑地』と『青嵐』の発動タイミングを練習してきたが、実戦で試みるのはこれまで数回ほど。失敗こそしたことが無いが、まだ改善の余地はあつて、互いの能力の発動タイミングを

見極めなければ、刃の嵐の威力をより上昇させることはできない。弥生もフェルトも練習は欠かさないが、やはり難しくはあった。そもそも、息が合わないのだった。

昔からフェルトと弥生は性格が違いすぎるせいか、何に關しても共感し合えたことがない。『青嵐』と『緑地』のコンビネーションが何年経っても完璧に至らないのは、そういった性格の差が原因であるらしかった。弥生は明るく天真爛漫であり天然なトコロがあるが、フェルトは口数が少ない上に何を考えているかわかり辛くて、よく難しいことを考えている。そんな二人が協力し合うのだから、幼馴染といえども息が合わない。フェルトに至ってはこのコンビネーションが完璧な形に至ることを諦めている部分さえある。対して弥生は、一意専心すれば何とかかなると思っていたりするのだった。

右脳派と左脳派。

思索派と感情派。

極端に言ってしまうえば、それほど違っている。ただ『青嵐』と『緑地』を使えるのは六希の内のフェルトと弥生のみ。故に、代わりはいない。そんな二人が、河原にて、歪撃退イビツのための準備を進めている。赤い雪が丁度止んだ頃だが、赤緋猿はもう充分繁殖しているので、河原であるそこにも大量のそいつらが屯っている。二人……今は主に『青嵐』の使い手であるフェルトが、赤緋猿どもを武器を使うことによって退けている。

戦場は河原。河原。

河原には、河童が住んでいると言う。清流の澄み渡っている『青嵐』にとっては好都合な川流れを見つめながら、フェルトはその昔、河童のせいで力を奪われたことを思い出す。まだ幼くて、幼くて、東と西の区別がつかなかった幼少期。フェルトは教育係のおばさんと一緒に、『青嵐』の練習のため河原に降りていたが、その時に足を滑らせて川に転落した。溺れそうになって薄れいく意識、ああ、死ぬんだと気持ちよい思いが全身を包み込んで、川の水の冷たさをわからなくなつた時、たしかにフェルトはセイランに昔から伝わる

伝説上の生き物、河童、を感じ取った。感じただけで、視てはいない。だが河童を感じた。頭にいつも湿っている皿の乗っかっている、背中に甲羅を背負ってきゆうりを片手に持ち、皿が乾き切ってしまう、死んでしまう河童。

フェルトは六希の中でも、前線の要員として、背丈がペットボトルのように小さな時から期待されていた。青の宝石はそういった赤子を産むと占い師も生前に言っていたし、フェルトは赤ん坊の時から何事も飲み込みが良く、眠つきも大人のように鋭く、赤子にして何かを悟っているかのような赤ん坊だったのである。

そして実際、成長すればする程、彼の戦闘要員としての素質は内側から外側へと発露され、『青嵐』の能力を使わずとも、魔法と武力によって歪を滅殺できる戦士になるだろうという評を下される子供になったのである。河原に落ちるまでは。

河童を感じ取ってから彼の才能は鳴りを潜めてしまい、これまで戦闘要員として格が違う次元が違うと大人たちが比べていた之史と同じレベルになり、明らかに、弱くなった。河原に落ちて溺れる以前、之史とフェルトは毎日のように試合をし、その決着が付いた後も喧嘩の取っ組み合いをしていたのだが、その全てはフェルトの勝利で終わっていて、之史がいつも地面に横たわっていたものだった。フェルトが河童を感じ取ってからは違う。之史とせいぜい五十歩百歩。良い勝負をするようになった。それがフェルトの失敗が何一つ無かった人生の中での、初めての屈辱だったと言えよう。プライドが真つ二つに引き裂かれて、之史に勝つても、負けても、幼いフェルト少年の心は満たされなくていつも不満。なんでこうなってしまったんだ、原因があるはずだ、と幼い頃から思索的だったフェルト少年は、当時は河童が原因だとは思わなかった。頭の隅には、河童のことがいつもあったが、彼はそういつたオカルトを信じるようになったら人間オシマイだと考える、生まれつき思索的な捻くれた子供だったので、河童が原因なはずはない、と頭ごなしに自らの脳味噌に釘を打ち付けたのである。だが、結局十七歳になっている現在

の彼はこう結論をつけている。

僕は、幼い頃に溺れた時に感じ取ったあの河童のせいでパツとしない戦闘要員になってしまった、と。

弥生が『緑地』発動のために意識を集中している間、フェルトは気を抜かずにいようと河原の原っぱに立つ。赤い雪から沸いてくる歪^{イビツ}たちを^{ハリテフル}変幻自在^{セント}ノ十字架で刀状に変形させて切り裂くことで、『緑地』で集中している弥生に連中が襲い掛からないよう守り続ける。守りながら、フェルトは相変わらず仲間を信用しきっている安心した様子で、緑の両眼を閉じて、祈るように両手と頭を垂らして大地にひざまづいている、六希で一番の天然者である弥生の様子を伺う。

（『緑地』準備中は、完全に自分の世界だから……。いや、自然と対話している、だっけか。呑気なもんだよ、こうやって僕が苦勞して^{ハリテフル}変形自在^{セント}ノ十字架で歪^{イビツ}を退けているからいいもの。僕がちよっと手を抜いたら、地面に土下座している弥生は、喰われることに自らが付けないんだぜ……。ていうか、こいつはこっちに何の合図もなしに急に『緑地』を発動させるから、いつもやり辛いんだ……。何回言っても駄目……。てへ、忘れちゃった、とか言うんだらうな……。よっぽど意識を集中しないと発動できないのか、それともこいつが自己中だからか……。ま、こうやって考え事をしながらでも余裕で退けられる歪^{イビツ}相手の時は、別に『緑地』と『青嵐』のタイミングがずれたってそこまで問題はないんだから良いんだけど……。倒せなかつた分は、どうせ之史が全部処理してくれるしな……。ああ、之史。あいつはまったく、どこで油を売ってるんだか……。もうすぐ由観見が『燈火』でドーム中に降り注いだ歪^{セキレザル}を惹き寄せ終わるってのに……。まあ、『青嵐』と『緑地』が完全な効力を発揮すれば、之史に後片付けをしてもらう必要もなくなるんだけど……。僕と弥生じゃ、どうやったって上手くいきっこないしね。ていうか、弥生がもつと他人に気を配ってくれればいいんだよ。何回言っても弥生は呆けたままだ。こいつの性格はどうなってるんだらう。脳味噌の中は。リヨ

クチの人間って、みんなこいつみたいにノホホンとしているのだから……ん、由観見の燈色の羽の羽ばたきが、見えてきた。相変わらず、綺麗なものだね……)

ドーム内に赤い雪として擬態、侵入した歪イビツは人間を数で押し潰すつもり。

なるほど、数には数を、ということだろう。だが所詮、歪セキヒザルの特徴など数が多いという点のみ。魔法を多少扱えるだけの無力な人間は殺せるだろうが……、一匹、一匹の個体は脆い上に特筆しとかなければいけないような能力もない。強いて言うなら、色遣いが気持ち悪いみたいな感じ。絶妙に気持ち悪い配色。それがあある意味、武器。それら全ての赤緋猿の鼻を、『燈火』が惹き寄せて、もうすぐ連中が河原に大集合しようとしている。そして『青嵐』と『緑地』の組み合わせで惹き寄せられた馬鹿な猿どもを、まとめて刃で切り刻み虚無に還す……。そうすれば連中は怨念ごと消えてなくなる……。フェルトは状況の整理をしながら、すでに近寄ってくる雑魚を百匹ほどは手持ちの武器で殺していた。だが猿はもはや何千匹はいるように見える。人によっては吐き気を催す光景だな、とフェルトは思う。数。数。数。数。数。数。猿達はケケケとこれから殺されることわからず、数で圧倒的だからと言って勝利を確信し、明らかに油断している。間抜けどもめ。

フェルトは悪態を付くことで感情を昂ぶらせると、『青嵐』を発するための力を空いている手で練り込む。弥生の様子を伺うと、もう彼女を中心にして、花と草が咲いている。円の形になるようにして咲いているそれらは『緑地』でしか咲かない花、六ノ彩華。光の角度によって見える色が変化するその花は、咲くだけで六希の戦力を向上させ、歪イビツの戦力はダウンさせる。

(猿どもは燈火で集まってきた。緑地はもうすぐ発動できる。……青嵐は六ノ彩華によって効力を増幅させられて、花ごと敵を吹き飛ばす刃の嵐を発生させる！ それも上手く行くタイミングは一瞬。弥生を巻き込まないように由観見が彼女を拾い上げてから、

猿どもが僕に対して意識を集中させる時。そして六ノ彩華が青に染まって見える時……。弥生の発動タイミングが少し早いような気もするが……。いつものこと……。僕の方から合わせる……。！)

彼は意気込む。ハク口の混沌を静めるために、いまや一万以上の数に増えていそうな赤緋猿たちを葬り去る、『緑地』と組み合わせることによって威力を増大させる『青嵐』！刃を纏いし、広範囲の敵を切り刻む凶気の嵐！

「アあああああああああああああああ！」

それは『緑地』を発動する時の弥生の叫び。唸り上げるような、苦慮に塗れているようにも聞こえる深々しい声帯の震え。終わると同時に、六ノ彩華が河原中に花開く！

一瞬。草っぱらでしかなかった大地。赤い雪の黒々しい跡がこびりついていた地面、赤緋猿の群れが踏む潰していた土に花びらが咲き誇る。色鮮やかな赤、青、緑、白、燈、金の六色へと光の反射によって色を転ずる、『緑地』の力によってしか咲かず、『青嵐』によって吹き飛ばされる運命の花々。槿花一日の栄。咲き誇る。

未曾有の危機を救うために生まれし六人の希望。彼らはハク口の都市を怨念の魔の手から守るために積み上げし鍛錬の力を振う！正義の一撃を！希望の活路を開くための奮起を！それこそが六希と呼称される六人の、存在意義！

彼らが宝石を与えられて生まれた理由は！六希と言っておだてられテレビにも出演する理由は！何故彼らに多額の費用が使われるのか！世の中の金が彼らに対する費用として消費される理由！誰よりも彼ら自身がそれをわかっている！生まれた時から教育係の人たちの、優しくもありながら厳しくもある教育を受けた彼らには、十分すぎる程にそれが理解できています！存在意義！それすなわち、人間の障害の抹殺！人間という種が健やかにこれからも発展していくために、六希たちは存在している。維持されている！社会に受け入れられている！今、彼らはその存在意義を示さなければならぬ。歪イビツや遽墟渠（あわただしい大きなかしら）を生まれつき与えられし能

力によつて、世界から粉塵も残らぬほどに消滅させるのが彼らの役割！

「粉、降り落としてきたよ。もうすぐ都市内に侵入した全ての歪イビツがやつて来る。羽で『青嵐』の範囲外まで避難し終わるまで、一分間必要だけど、大丈夫？」

由観見が『緑地』の詠唱を終えて、ふらふらと気を失いかけている弥生の肩を持つ。すると弥生の背中にも『燈火』の羽が、由観見のものよりは小さいが、生える。

由観見は飛び立つ前に、河原を一度だけ見渡す。敵の規模を地上から見渡すのと、空中から見下ろすのではまた違イビツうのだろう。パツチリとした二重の眼を何度か瞬かせてから、やっぱり歪イビツの活動は活発化しているんだね、と何やら納得したかのような独り言を呟いた。フェルトは変幻自在バリアップルノ十字架セントで猿を牽制しながら、空いている手に青いオーラを集束させている。戦いながら『青嵐』を練り込むことが出来るのはフェルトの器用さが為せる技であると同時に、その器用さがなければ『青嵐』の使い勝手の悪さはより際立っていただろう。『青嵐』を使うために器用になったのか、器用だから『青嵐』の能力がこのような形に落ち着いたのか。それはわからない。フェルトは敵を一体切り払ってから、由観見に精悍なる顔立ちを向けて、「心配はご無用」

と余裕を見せ付ける。

由観見はそのフェルトの青い眼に、ギラギラとした光を視た。それは『青嵐』がもつとも上手く行く時にフェルトが見せる、本人は無自覚の妖光であつたから、任せて大丈夫だと由観見は確信できた。『青嵐』によつて六ノ彩華が華々しく散っていく様を、上空から物見させてもらおう、と自らの役割は終わったことを彼女は確信した。由観見はふらふらの弥生と共に空へと上昇していく。意識がかるうじてある弥生が、フェルトに向つて手を軽く振つて、……がんばつてねえ……、と小さな声で声援を送つた。フェルトは聞いていなかつた。『青嵐』のエネルギ―の回転が、片手の中でうねりを増せば

増すほど、集中力が必要となるし、その上で向ってくる赤緋猿を武器で退けるのは一苦労だった。だが、一分が経過し、由観見と弥生が夜空に輝く星のように、上空で小さく燈色に輝いているのを確認し、『青嵐』の練り込みも終わった時には、その一苦労は報われる！

フェルトは六ノ彩華が青色に色彩を変えるタイミングを見計らう。その間に赤緋猿が背後から彼に接近して襲いかかるうとするが、背後にも気を配ることは忘れず、簡単にそれを振り払ってみせる。そして再びタイミングを見計らい……………。

(……………いまだ)

「青嵐！」

フェルトは河原中に響く壺声を轟かせた。声が響き終わった後、ほんのわずかな間沈黙が走ったが、その遅れを取り戻すかのようにぐもった風の音が、河原中を行き渡り、フェルトの壺声ごと全ての音声を掻き消す。そして河原の水溜たちや、咲き誇っていた花々たち全てが、『青嵐』の力によって集められたかと思うと、肉体を切り裂く刃へと変わっていく。河原の自然の多くが『青嵐』に集束されて力と化し、刃となった力は一万匹を越す歪^{セキヒザル}たちの群れを、上空へと掬い上げて渦中に吸い込み、その渦中で幾重にも回転し続ける刃の餌食にさせる。餌食となった歪^{セキヒザル}たちは身体を寸断されたかと思えばミンチにされ、ミンチだったかと思えば細かな粒子のようにさらに細かくされていく。

一万匹の餌食を『青嵐』が喰らい、自然を喰らい、河原は荒れ果てた地となった。

その荒れ果てた地となった河原に、細かくなりすぎて空気と判別が付かなくなった歪^{セキヒザル}たちの塵が積もっていく。一万匹という圧倒的な数は、嵐によって切り刻まれて、たしかにこの世界から抹殺されたのだった。

その抹殺を行った張本人であるフェルトは、『青嵐』の使用によって体力が消耗してしまったためにふらついている。眩暈を起こしながらよたよたとしているが、まだ敵が残っているかどうか、それ

とも全滅できたのか、確認するために頭を上げてみたところ、まだ数百体以上は残っているとわかった。範囲がわずかに狭かったな、とフェルトは心内で少し暗くなる。

(残りの処理はみんなに任せるしかないな……)

『青嵐』を発動すると一時間はまともに動けなくなる。フェルトがふらふらしていると、由観見がゆっくりと降りてきて、お疲れ様、と軽く告げてから手を伸ばしてきたので、彼はそれに手を伸ばす。手と手が繋がれた瞬間に、フェルトの背中にも羽が生えて、一瞬にして三人は空中に上昇した。

フェルトは上空から、もはや荒地となった河原とは言えない自然環境と、その範囲から外れた位置でキヤキヤツと自由闊達に動き回る歪セキヒザルを見下ろす。六ノ彩華もわずかに範囲外に咲いたおかげで残っているのも見えて、ああやっぱり息がわずかに合わなかったんだ、とフェルトは隣でぐーすか寝ている弥生をちらつと横目で窺う。

「之史と、Lili、ヒグの到着は、少し遅れるみたい。私が羽で回収できればよかったんだけどね……」

「……まあ、残り数百体程度、一般人が束になってかかっても殺せる。『燈火』で連中をこの河原で固めておいて、三人が到着したら三人の能力で始末してもらおう。完璧」

「そうね。それなら完璧かも」

「何か不安なことが？」

「……嫌な予感がするんだよね」

「女の勘だ！ 弥生のはまったく当たらないけど、由観見のはよく当たる！」

「何が起こるかとかは、わからないんだけど……」

「まあ、そうそう勘つてのは当たるものじゃないし。だいじょだいじょぶじやないかな。」

そう言おうと思ったフェルトの口が固まる。なぜなら、地響き。ゴゴゴ、と。

「はは……。当たったんじゃないの、由観見。当ててくれなくて良

そして、駄目か、と思っていたら歪ワームの顔面辺りが弾け飛んで無くなっていった。黄金色に輝きながら赤いオーラを跡に残す一つの線が、ワームの首元を貫いていた。ようやく助けが来たのか遅すぎるだろうと苦笑してから、フェルトは眼を閉じて穏やかに眠った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6816z/>

歪

2012年1月14日01時03分発行